

第3節 防災教育指導計画と取組の実践

県教育委員会では、震災以後、人間としての在り方生き方を考えさせる「新たな防災教育」を推進してきた。各学校においては、学校教育全体にわたる防災教育の年間指導計画を作成し、防災教育副読本を活用した取組や地域の素材を生かした教材開発、「総合的な学習の時間」における取組など、創意工夫を重ねながら教育実践を行ってきた。

1 「新たな防災教育」の取組の成果

「新たな防災教育」について、どのような成果が上がっているとお考えですか、という設問に対して、各学校から次のような回答が寄せられている。

①防災意識や危機対応に関する意識の高まり

- ・緊急時に冷静に行動できるようになった。(小)
- ・被災体験の風化の防止。(小)
- ・地域の防災訓練に進んで参加するなど、防災を自分のこととして捉える生徒が増えてきた。(中)
- ・全教職員が緊張感を持って訓練に臨むようになった。(中)

②ボランティア教育・実践による助け合いの精神の涵養

- ・助け合い協力することの大切さが理解できている。(小)
- ・高学年児童が低学年児童の面倒を日常的に見るようになった。(小)
- ・生徒会を中心にボランティア活動への取組を行うようになった。(中)
- ・「困ったときはお互い様」「できることから助け合おう」という態度が見られる。(中)
- ・地域の団体と連携したボランティア活動サークルが結成されるなど、生徒や教職員のボランティア活動が継続して実施されている。(高)

③生命尊重の精神の涵養

- ・自分たちの命を意識して守ろうとする意欲が高まってきている。(小)

④高齢者・障害者への理解の深まり

- ・いわゆる災害弱者の立場や行動への理解が深まり、集団や地域での安全に役立とうとする意識が芽生えてきた。(中)
- ・自分の安全を確保するだけでなく、障害のある生徒を積極的に支える意識が向上した。(高)

⑤自分を見つめ、生き方を考える姿勢や態度の育成

- ・自分のことを振り返り、見直す機会が増えている。(小)

⑥地域との交流の活性化

- ・地域と学校のつながりが密になり、保護者とかわりながら教育活動を進める機会が増加した。(小)
- ・子どもたちが地域の人々とのコミュニケーションの大切さに気づき、登下校の挨拶などを積極的にできる児童が増えた。(小)
- ・奉仕活動で地域の清掃をするなど、地域に目が向いてきている。(中)
- ・町をあげて進めている東南海地震対策への認識が深まっている。(中)

2 防災教育年間指導計画の立案

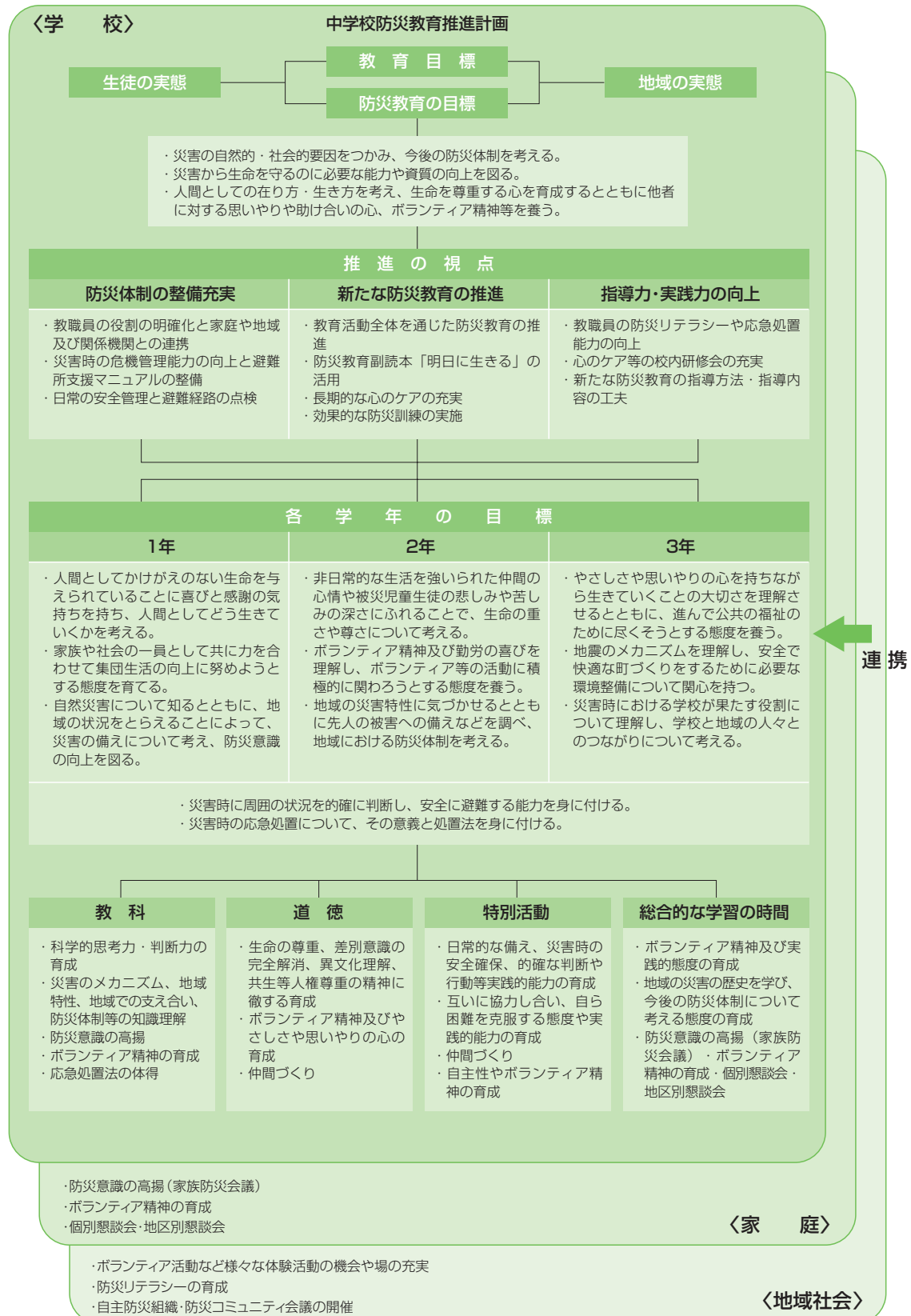
防災教育は、児童生徒の発達段階、地域の特性や学校の実態に応じて指導内容を検討し、各教科、道徳、「総合的な学習の時間」、特別活動など、教育活動全体を通じて計画的に進めることが大切である。そのため、各学校においては、検討した指導内容をもとに推進計画を立案し、児童生徒一人ひとりが災害に適切に対応する能力が確実に身につけられるよう、指導の充実を図らなければならない。

児童生徒に人間教育を基盤とした防災リテラシーを身につけさせるためには、特定の教科による取組だけでは不十分である。そのため、各教科、道徳、特別活動の内容を関連させながら、防災教育が体系的・計画的に推進されるよう配慮することが重要である。また、その実践の成果を絶えず点検・評価し、指導計画の体系にフィードバックすることが必要である。

防災教育の年間指導計画を作成するためには、学習指導要領から、防災教育に関わる指導内容を選び出して整理し、その上で、防災教育のねらいを明確に

して、関連する副読本の題材や新聞記事、写真、映像等を総合的にとらえ、また、体験活動等の要素も取り入れながら年間指導計画を作成することが大切である。

ここでは、中学校の防災教育推進計画の事例及び小学校と中学校の防災教育年間指導計画の事例を紹介する。



〈尼崎市立若葉小学校 防災教育年間指導計画〉

低学年

〈 〉は副読本『あすにいきる』 ○はビデオ

月	防災教育関連行事	1 年			2 年			3 年			
		教 科	道 徳	特 活	教 科	道 徳	特 活	教 科	道 徳	特 活	総合的な学習
4	年間指導計画・組織 校区・通学路の安全確認 学級連絡網作成 地区別安全下校指導	体:ならびっこ 生:がっこうたんけん							く春が来た		
5	集団下校訓練 避難訓練計画 防災器具の整備点検	生:がっこうのまわりをあるいてみよう			生:春の町をたんけんしよう			国:くぼくの町がなくなつてしまった			防災マップ作り くぐらっとくるまに
6	防災訓練 (授業中・地震火災) 豪雨・台風に備えて 水泳安全指導 ボランティア活動(地域と協力クリーン作戦)			防災訓練事前事後指導 ○防災教育ビデオ (く地しんがおきたら)	生:生き物のひろばを聞こう	く私のシロ	防災訓練事前事後指導 ○防災教育ビデオ	社:校区や町の様子		防災訓練事前事後指導 く校区を歩いてみよう	
7	教職員研修(救助法)	体:みずあそび (く水がでたよ)	くおふろにはいったよ	夏休みの生活	図:水やかぜとあそぼう 体:水遊び		夏休みの生活	体:水泳	くひとつになった	夏休みの生活	
8	防災器具の整備点検										
9	防災教育講話(地震について) 防災週間			防災授業	図:つくろうあそぼう	くおばあちゃんこれ					
10		国:じどう車くらべ						社:わたしたちのくらしと商店			
11	防犯訓練(不審者侵入)				生:のりものにのろう	くありがとう					
12	集団下校訓練 教職員研修(防災教育講話)	体:のをこえ山をこえ		冬休みの生活		く元気でよかったね	冬休みの生活		くいつまでもわすれない	冬休みの生活	
1	防災訓練(予告なし、地震火災) 消防署招聘(防災器具の取り扱いなど) 追悼式	くみずくみたよ		防災訓練事後指導	図:ふしぎな森のなかまたち		防災訓練事後指導 くしんぞうがまわりそうだった	理:電気で調べよう 社:地域の災害を調べてみよう くあなたのまちは大じょうぶ?	くとてもよかったよ	防災訓練事後指導	災害から命を守ろう く大地しんがきた
2	教育相談 防災器具の整備点検										
3				春休みの生活			春休みの生活		くいろんな気持ち	春休みの生活	

高学年

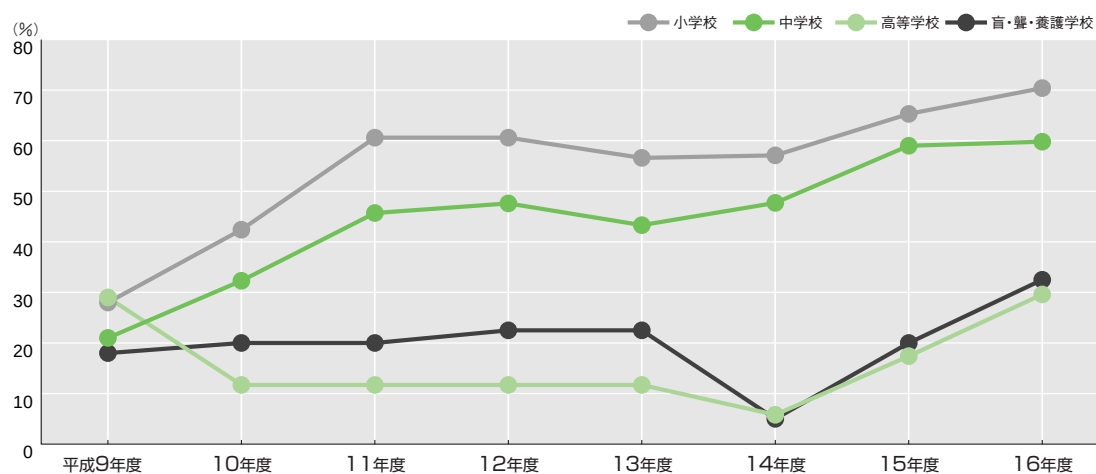
〈 〉は副読本『明日に生きる』 ○はビデオ

月	防災教育関連行事	4 年				5 年				6 年			
		教 科	道 徳	特 活	総合的な学習	教 科	道 徳	特 活	総合的な学習	教 科	道 徳	特 活	総合的な学習
4	年間指導計画・組織 校区・通学路の安全確認 学級連絡網作成 地区別安全下校指導	社:健康をなくらしをささえ				家:わたしたちの家族	く新しいなま			理:物の燃え方と空気 家:よりよい家庭生活を求めて	くとちに支え合つて		
5	集団下校訓練 避難訓練計画 防災器具の整備点検	社:命とくらしをささえ				家:さいほう用具を使って				家:エプロンカバーをつくらう			く私にとっての地震
6	防災訓練 (授業中・地震火災) 豪雨・台風に備えて 水泳安全指導 ボランティア活動(地域と協力クリーン作戦)	国:カブトガニを守る 社:安全なくらしを守る 社:火事を防ぐ理:流れる水のはたらき		防災訓練事前事後指導 ○防災教育ビデオ		国:大陸は動く家:たまごの調理 体:保健学習	くぼくは一人じゃない	防災訓練事前事後指導 ○防災教育ビデオ	く地震がおきたら く防災マップをつくろう	国:人類は減びるか 家:ジャガイモの調理加工品を調べよう		防災訓練事前事後指導 ○北淡町の記録 く地震知っていますか	
7	教職員研修(救助法)	国:白いぼうし 体:水泳	く花の水	夏休みの生活		体:水泳	く仮設住宅	夏休みの生活		体:水泳		夏休みの生活	
8	防災器具の整備点検												
9	防災教育講話(地震について) 防災週間	社:私たちの県 兵庫県		防災授業				くとつぜん町がこわれた くその時から学校は		家:私たちの食生活			
10		社:県のような人々のくらし				国:私たちの生きる地球 理:天気の変化 家:野菜の調理	く何かしたい役に立ちたい			理:大地のでき方 く大地がゆれ動いた く土地の様子と災害			
11	防犯訓練(不審者侵入)	社:きょう土を聞く	くおとうさん		く災害について考えよう	家:身の回りの整理整頓 体:保健学習				理:水溶液の性質 家:暮らしと買い物			
12	集団下校訓練 教職員研修(防災器具の取り扱いなど)	社:さまざまな土地の暮らしと国土のようす 図:電線系のこの使い方		冬休みの生活		図:木を使って	く何も考えられない	冬休みの生活		国:守る、みんなの尾瀬を 社:私たちの願いと市や国の取組	く悲しみを乗り越えて	冬休みの生活	
1	防災訓練(予告なし、地震火災) 消防署招聘(防災器具の取り扱いなど) 追悼式	国:こんぎつね くおばあちゃん風呂にはいりよ		防災訓練事後指導 (12時にサイレンが町中にひびいた)		家:ミシンを使って 社:私たちの暮らしと国土のようす	くひきさかれたパイプライン	防災訓練事後指導		社:私たちのくらしと憲法 理:地震のはたらき		防災訓練事後指導	
2	教育相談 防災器具の整備点検	理:水の旅				体:保健学習				理:人と環境 家:これからの家庭生活	くぼくも何かしよう		
3				春休みの生活		社:かけがえのない地球		春休みの生活		家:住み良い地球の環境を考えよう	く今日は青い日	春休みの生活	

〈篠山市立篠山東中学校 防災教育年間指導計画〉

月	防災・安全関連行事	特別活動等	道徳(主題名)	教科		
				1 年	2 年	3 年
4	自転車点検・交通訓練 校外生徒会 防災(避難)訓練 交通立番指導 校内安全点検	・安全な登下校指導と通学路の確認 ・避難方法と避難経路の確認 ・集団行動と救急体制 ・校外学習事前指導	・学年、学級集団のあり方 (学年集会・…学年目標) (学級集会・…学年目標)	・実験器具の安全な取り扱い(理) ・健康な身体(保体) ・世界と日本の山(社)	・実験器具の安全な取り扱い(理) ・健康な身体(保体) ・電流とその性質(理)	・実験器具の安全な取り扱い(理) ・健康な身体(保体)
5	交通立番指導 校内安全点検	・日常の防災指導 「廊下の右側歩行 不審者への対応」 連絡網の確認 ・連休の過ごし方 ・修学旅行事前指導		・木工具の安全な使用方法(技)		・自衛隊の災害救助(社)
6	交通立番指導 校内安全点検	・警報発令時の対応 ・梅雨時の健康と安全	・生命の尊重 (弟たちの誕生VTR) ・自立への意欲 (決心)	・身のまわりの物質の変化(理) ・救急法(保体)	・救急法(保体)	・人権を守る社会をめざして(社) ・救急法(保体)
7	交通立番指導 校内安全点検 校外生徒会 校外生活部補導(PTA)	・夏季休業中の過ごし方について ・夏季休業中の過ごし方について ・災害発生時の避難方法について ・暖房器具の安全な取り扱い方	・世界平和、人類愛 (ナガサキ八月九日) ・社会連帯の精神 (車いすの重み)	・衣類(繊維)の燃焼実験(家) ・薬害について(保体) ・性教育(保体)	・僕の防空壕(国) ・衣類(繊維)の燃焼実験(家) ・薬害について(保体) ・性教育(保体)	・ごはん(国) ・薬害について(保体) ・性教育(保体)
8	校内安全点検 校外生活部補導(PTA)					
9	交通立番指導 校内安全点検	・体育祭に向けての健康、安全指導	・法の遵守(手術中止)	・防火、安全ポスター作品展(美) ・曇れ川を治める(国)	・防火、安全ポスター作品展(美) ・動物のくらしとなかま(理)	・防火、安全ポスター作品展(美)
10	交通立番指導 校内安全点検	・文化祭に向けて ・地震発生時の避難方法について	・人間愛、思いやり (ぼくのお姉さん)	・安全な作業(技) ・光、音、熱、力(理) ・火気の取り扱いと安全点検(家)		
11	交通立番指導 校内安全点検 防災(避難)訓練	・トライやる・ウィーク事前指導 ・災害発生時の避難方法について ・暖房器具の安全な取り扱い方				・いろいろなエネルギー(理) ・ともに生きる社会(社)
12	交通立番指導 校内安全点検 校外生徒会 暖房開始	・安全な登下校(雪害) ・教室の換気について ・冬季休業中の過ごし方について	・自然愛、畏敬の心(地表の水) ・生命の尊重 (座礁して危険に曝されている船)	・大地は語る(理) ・大地が火をふく(理)		
1	交通立番指導 校内安全点検 阪神・淡路大震災を振り返る(全校朝会)	・大震災を振り返る ・災害時のボランティア活動のあり方	・生命の尊さ (生かされている)	・大地がゆれる(理) ・大地が動く(理)	・関東大震災(社) ・阪神・淡路大震災(社) ・天気の変化(理)	・地球と宇宙(理) ・20th Century Greats(英)
2	交通立番指導 校内安全点検				・電気器具の保守、点検、安全な利用(技) ・化学変化と原子分子(理)	
3	交通立番指導 校内安全点検 校外生徒会	・春季休業中の過ごし方について		・森林の役割(技)	・原子力発電(技)	・自然環境と人間(理) ・科学技術と人間(理)

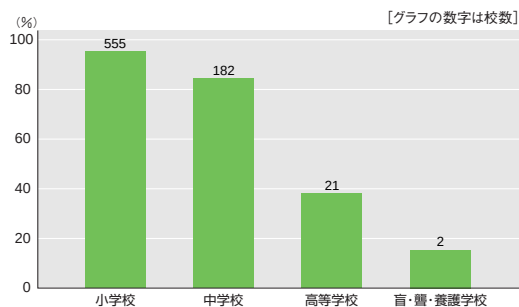
図表Ⅱ-2-2 防災教育年間指導計画(防災教育カリキュラム)の作成状況



3 防災教育副読本の活用

防災教育年間指導計画を作成している学校のうち、防災教育副読本の活用を指導計画に位置づけている学校は次のとおりである。

図表Ⅱ-2-3 防災教育副読本の活用状況



防災教育副読本を活用する上での課題は何かという設問に対して、次のような回答が寄せられている。

①教材としての内容・授業展開

- ・視覚に訴える教材が少ない。(小)
- ・地域素材として活用しにくい。(中)
- ・児童生徒の実態に適していない。(養)
- ・内容が一般的で生徒の興味・関心を引くことが難しい。(高)

②授業時間の確保

- ・LHRへの位置づけを考えているが、時間の確保が難しい。(高)

③教育計画上の課題

- ・教科や各領域との関連づけが難しい。(小)
- ・担任の指導に任せてしまっており、学校全体の指導計画が作成されていない。(中)

- ・防災教育が、各教科やその他の教育活動の中に位置づけられていない。(高)

④教員の意識

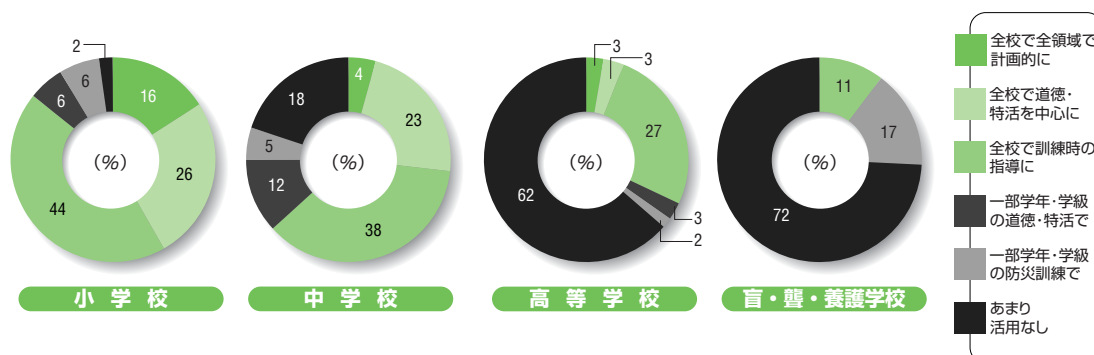
- ・副読本の活用についての教職員への啓発が不十分。(小)
- ・指導資料や参考資料の配布、活用。(小)
- ・副読本の内容について教職員の理解が不足している。(中)
- ・大きな災害に遭遇したことがなく、実感が乏しい。(高)

防災教育副読本を全校で活用している学校は、小学校86%、中学校65%であるのに対して、高等学校では33%にとどまっている。また、副読本の活用を年間指導計画に位置づけている学校は小学校74%、中学校44%であるのに対して、高等学校は4%に過ぎない。

防災教育副読本の活用を促進するためには、副読本で何を学ばせるか、目標やねらいを明確にし、活用する機会をあらかじめ設定するとともに、校内研修等において指導案の作成や副読本の効果的な活用について研修するなどの取組が必要である。また、地区別防災教育研修会等を通じて実践事例を交換したり、研究授業を実施したりすることが求められている。

防災教育副読本は発行から9年を経過し、その後の研究の進展を踏まえる必要がある点や児童生徒の実態に合わない面も出てきている。地域の素材を活用した教材開発やビデオ等の映像教材、インターネットを活用した情報収集など、各学校における創意工夫が望まれる。

図表Ⅱ-2-4 防災教育副読本の活用内訳



4 「総合的な学習の時間」における取組

「総合的な学習の時間」等において、防災教育を実践する際の課題は何かという設問に対して次のような回答が寄せられている。

①教育計画に関する課題

- ・学校独自のテーマがあり、防災教育が後回しになっている。(小)
- ・学習課題が多く、時間数が確保できない。(小)
- ・学年の年間テーマと防災の関連づけが難しい。(中)

②教員の研修・意識に関する課題

- ・防災教育に関する研修の不足。(小)
- ・震災体験、意識の風化。(小)
- ・系統だった年間計画を立案するための教材の精選と準備、指導する教員の防災に関する知識と経験の有無が問題であり、現在のところ、防災教育を自信を持って指導できる教員がいない。(高)

③教材づくりに関する課題

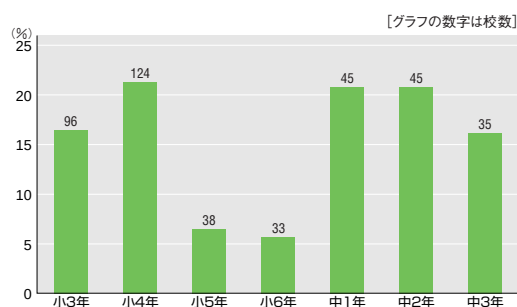
- ・専門的なことが多く難しい。複数の領域にまたがると特に難しい。(小)

- ・調べ学習をする際の児童向けの資料が少ない。(小)
- ・実践例が紹介される機会が少ない。(小)
- ・地域素材を生かした継続した教育を進めるための準備の余裕がない。(中)
- ・生徒の自発的な関心の中に、防災について調べようという意識が希薄である。(中)

「総合的な学習の時間」の取扱いに関しては、各学校において「地域や学校、児童(生徒)の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童(生徒)の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行う」ものとされており、学習テーマの設定、教材の作成等は各学校に委ねられている。

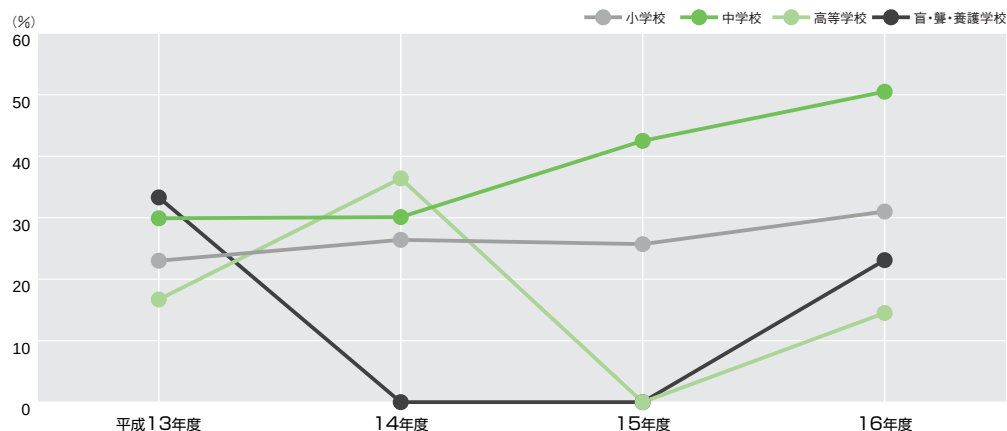
「総合的な学習の時間」に必ず防災教育を取り扱わなければならないものではないが、教員の指導力や教材づくりなどが実施上の課題になっているならば、それらを克服するための取組が望まれる。防災教育に関する教材や情報は近年格段に充実してきたが、それがまだ十分に活用されていないのが実情である。また、地区別防災教育研修会等を通して、実践事例の紹介に努めていく必要がある。

図表Ⅱ-2-5 防災をテーマとした「総合的な学習の時間」の実施学年



地域素材を生かした防災教育の研究授業（豊岡市立田鶴野小学校）

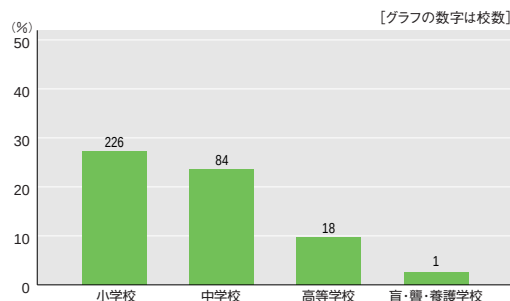
図表Ⅱ-2-6 防災をテーマとした「総合的な学習の時間」の実施状況



5 地域素材を生かした防災教育

子どもたちに自らの生活と災害とを結びつけて考えさせることをねらいとして、地域の素材を生かした教材開発に取り組んできた。その成果を、平成12年度に『地域素材を生かした防災教育実践事例集－「総合的な学習の時間」等を活用して－』にまとめて発行した。その後も地区別防災教育研修会等で地域素材を教材化した実践事例が報告され、蓄積されている。

図表Ⅱ－2－7 地域を素材にした防災教育の実施率



〈地域の素材を活用した防災教育実践例〉

校種	学年	教科・領域	内 容
小	2	生活	校区内の自分の好きなところや紹介したいところを見学し、紹介カード及び校区の地図を作る。その中で、学校や公園等が地震のときの避難場所であること、また、「子ども110番の家」がどこにあるかなど、防災・防犯関連施設について知る。
小	3	社会	校区巡りの学習で、防災施設などを知り、安全な暮らしを守る仕組みについて考える。
小	3	社会	校区内の消火栓、消防倉庫等を調べ、地域の安全について知る。
小	4	総合	ハンディキャップ体験から校区のバリアフリーについて調査し、ボランティアについて考える。
小	4	社会	水道と生活の結びつきを調べたり、水を確保するための人々の努力を理解した。また、地域に点在するため池について、農業を支える働きや地震、大雨による堤の決壊という災害等、学習を広げた。
小	4	社会	「人々の暮らしを守る」で、災害時における地域の防災システムや消防団の仕組みについて学習した。
小	4	総合	かつて校区内で起こった洪水の様子や、それに対する先人の取組について調べた。
小	4	学級活動	活断層である山崎断層について理解させ、地震が起きたときの備えや適切な避難の仕方について学習した。
小	5	総合	校区内の震災時の様子について地域の人の話を聞き、資料にまとめて全校生に発表した。
小	5	学級活動	山崎断層を震源とした地震時、西脇市の被害状況の想定と対応について学習した。
小	5	社会	私たちの暮らしと国土で、森林破壊による災害を学習し、学校の裏山を調査した。
小	5	理科	校区の川の様子を見つめ、過去の川の災害について聞き取り調査などをして、防災対策がなされていることに気づく。
小	6	総合	湊川の洪水の歴史について。
小	6		円山川の洪水を防ぐために。
小	5・6	特別活動	少年消防クラブ20名による、消防署での体験活動。
小	全	特別活動	校区内の防災施設の見学。
小			地域の安全を守るため地元でボランティアとして携わってくれている交通安全協会の人々や、消防団、青少協、PTA、防災福祉コミュニティの方々のお話を聞くとともに防災施設の見学をしたりして研究発表を行う。
中	1	学級活動	通学路における危険箇所や子どもを守る家の確認。
中	2	道徳	過去の災害の教訓が生きたことや住民の連携について学び、防災意識を育てる。
中	2	学級活動	昭和51年9月13日の山津波災害を題材に、そのときの状況・復旧作業・人々の助け合いの大切さについて学習した。
中	全	総合・道徳・学級活動	「人と防災未来センター」での学習を踏まえ、DIGで校区内の危険な箇所をチェックし、話し合う。
中	全	学級活動	災害時に道路等が寸断されそうなところの確認と備蓄倉庫の確認。
中	全	道徳	北但大震災について。
中	全	特別活動	町の地図を用意し、津波による被害の状況と避難場所の確認を行った。
中			ボランティア活動により、日ごろから地域住民、とりわけ高齢者とのふれあいを持たせ、災害時に中学生がどう動くかを考えさせた。
中			校区内のバリアフリー、ユニバーサルデザインを調べていく中で、なぜ本校校区にはこれほど公園が多いのかが疑問になり、大震災の教訓によって造られたことを知り、そこから防災に関する学習へと導いた。
中			「新たな街づくり」という観点で、地域の人々（街づくり協議会等）に震災当時のことや防災にかける気持ちについて話を聞いたり、現地（道路、公園）に出向き防災施設を見学した。
中			「広報こうべ」の防災関連記事を利用し、地域の危険箇所、近所の避難所の場所などを学習する。
中			地域の公園、学校にある震災の慰霊碑調べを行う。それを建立した人々から震災についての聞き取りを行う。その調査をもとに新聞を作り展示発表する。
高	1		地球の変動の例として兵庫県南部地震を取り上げた。導入として「阪神・淡路大震災映像記録」毎日及び朝日放送のものから編集し、地震直後の様子などを見せた。また、実習として兵庫県南部地震の震源の分布を調べた断面図の模型を制作した。
高	2		学年末に、地元消防署より講師を招き、地域特有の高潮等の被害とその対策について学習した。
高	全	学校行事	1.17震災メモリアル行事を地域の人々、近隣の小・中学校と合同で行った。他に、環境防災科の生徒が近隣の児童に対して防災教育を行ったり、一緒に地域の安全マップづくりをした。
高	全	学校行事	防災・安全マップの作成。避難訓練のとき、アンケート調査にもとづいて防災・安全地図の作成を行った。
高	全		地域の岩屋山への全校登山を通じて組織的な非常連絡体制と生徒の自己管理能力を高める安全教育を推進した。
高			兵庫県南部地震の被災のビデオを見て、意見交換。北淡町室津地区を例にした災害に強い町の計画案の作成、他。
高	全	特別活動	加古川水系の災害と現状を生徒に理解させるため、国土交通省近畿地方整備局に講師を依頼し、ビデオ上映と講演会を行った。

地域を素材にした防災教育を実践する際の課題は何ですかという設問に対して、次のような回答が寄せられている。

①教材化の難しさ

- ・地域内で課題に適した素材が見つけない。(小)
- ・地域にある様々な素材について情報が収集されていない。(中)
- ・高校は校区が広く、地域の素材を具体的に取り上げることは難しく、一般論になりがちである。(高)

②教員の意識等に関する課題

- ・地域素材を教材化するにあたり、専門的知識が不足している。(小)
- ・全教職員で取り組むための共通理解や校内の組織づくりができていない。(小)
- ・防災教育の担当教員が毎年交代しており、取組の資料等の引き継ぎが十分できていない。(高)

③地域の理解・協力に関する課題

- ・体験的な学習を行う環境づくりを地域と協力してどのように進めるか。(小)
- ・地域住民の協力体制の組織化をどのように進めていくか。(小)
- ・生徒はもとより、保護者や地域住民の防災意識の向上。(中)
- ・教員が地域について勉強し、地域の人々との意思疎通を図ること。(高)

④関係機関との連携に関する課題

- ・町の防災センターの活用をどう図るか。(中)
- ・地域住民や関係機関との普段からの連携。(中)
- ・地域自治体、消防との連携を重視した計画の立案。(高)

⑤その他

- ・年間指導計画に位置づける際に、教科領域をどのようにクロスさせるか。(小)
- ・小・中学校で受けた防災教育の内容と重複しないようにすること。(高)
- ・素材は防災教育の実施にあまり関係しない。(高)

地域の素材の教材化や学習の展開には、様々なパターンがある。それを、「教材化の観点」と「学習活動の手法」により整理すると次のようなものが考えられる。

1. 教材化の観点

(1) 社会的な観点

- ①歴史的な観点：地域の災害の歴史やそれを克服してきた先人の知恵など
- ②同時代の観点：市町の防災システム、安心・安全のまちづくりなど

(2) 理科的な観点

地学的な観点：地域の地形や地質など

2. 学習活動の手法

(1) 調べ学習

- ・書籍
- ・インターネット
- ・取材、聞き取り など

(2) フィールドワーク

- ・校区、地域の防災施設等の調査
- ・校区、地域の地質、地形等の調査 など

(3) DIG

- ・防災・安全マップ、ハザードマップ など

(4) 社会教育機関等の活用

- ・市町の防災センター
- ・災害関係の社会教育機関 など

(5) 地域の人材の活用

- ・郷土史家
- ・市町の防災部局や消防署の職員
- ・自主防災組織の関係者 など

このような観点と手法の組み合わせ方を工夫することによって、地域素材の教材化に多様な可能性が広がってくる。

実践事例6

地域防災マップづくり・校内防災点検

淡路町立岩屋中学校

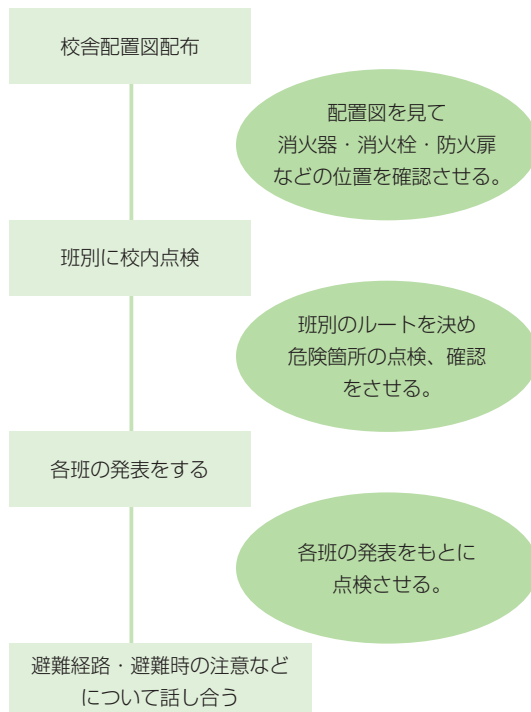
1 単元設定とねらい

生徒は日常生活の中で、「もし災害がおこったら」という視点で自分の生活をとらえる意識は少ない。また、阪神・淡路大震災の記憶も希薄になってきている現状の中で、災害から身を守ることへの認識さえも乏しくなっている。

そこで「自分たちが生活している学校、地域などの状況はどうなっているのか」という視点から、安全点検、防災マップづくりなどを行うことで、災害に備えるとともに、将来に向けて防災意識の向上を図ることとした。

2 指導計画

①校内防災点検（2時間）

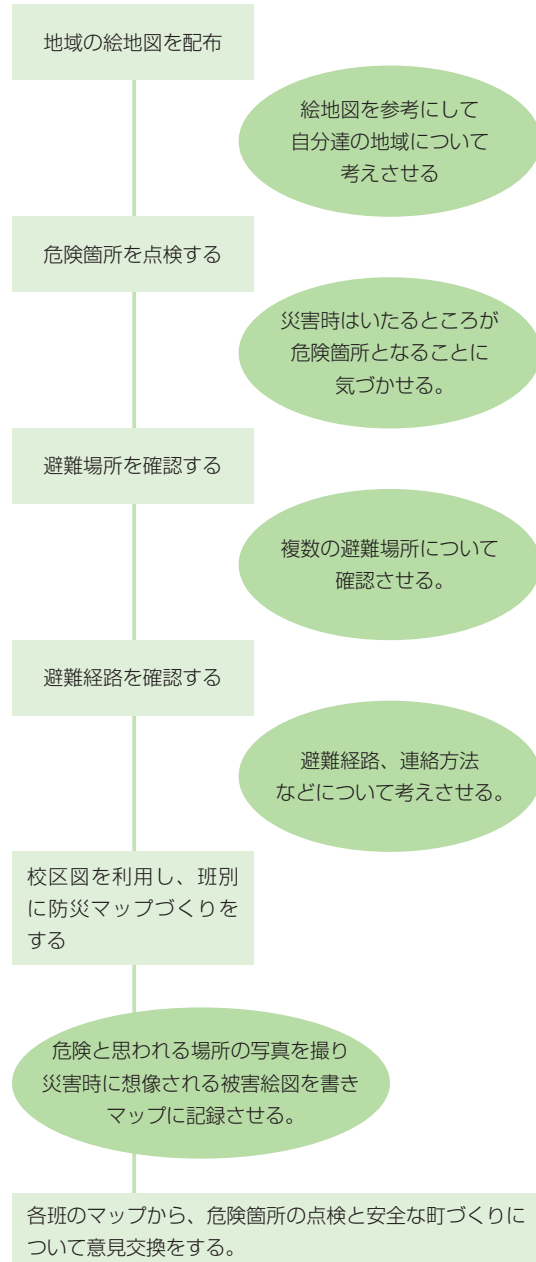


班活動の内容

班ごとに、校内の危険な箇所や消火栓、消火器、煙感知器などの点検を行った。普段の学校生活ではなかなか気づかない危険箇所を発見したり、ガラスの飛散を想定してみたりした。

建物の構造上の問題を指摘する生徒もいて、さまざまな安全対策が必要だと実感した。

②地域防災マップづくり（7時間）



マップづくりの工夫と支援について

通学路を中心に班ごとに安全点検を行った。

危険箇所の点検だけではなく、強風、大雨、地震、台風などさまざまな災害の状況を考えながらデジタルカメラで撮影した。

また、記録された画像をもとに被災状況を具体的にイメージし、想像画を描く。その際、そこに居合わせた自分たちの安全をいかに確保するか、を課題とした。

3 学習の展開（1時間）

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	備 考
「学校・地域の現状はどうだろう」		班活動
1 校内点検表を見ながら発表する。	・ 危険な場所を点検させる。	
「学校にいるときに災害が起こったら」		防災マップ
2 班で話し合い、意見をまとめる。	・ 危険な場所と安全な場所の違いはどこにあるのか考えさせる。	
「地域防災マップを見ながら 地域の危険な場所を点検しよう」		
3 地域防災マップを見ながら発表する。	・ なぜ危険なのか考えながら、登下校時に災害が発生した場合の行動について考えさせる。 ・ 避難場所を確認させ、自分の身は自分で守ることを認識させる。 ・ 阪神・淡路大震災の教訓を生かし正しい知識を身につけさせる。	

デジタル画像



災害時の想像図



4 生徒の意見交換

普段安全に見える場所でも地震、洪水、台風などの災害が発生すると、必ずしも安全ではないことや、災害の種類によっても状況が変わることが理解できた。また、自分の身の安全をどうやって

確保するかや家族との連絡方法、避難経路について日ごろから考えておくことが、いざというときに冷静に行動できるようにするための条件だと思った。

実践事例7

第4学年 総合的な学習の時間『セイフティ・北夙川』

西宮市立北夙川小学校

1 単元設定とねらい

◎阪神・淡路大震災を体験し、甚大な被害を受けた地域の人たちの体験や防災の話を聞くことによって、命の尊さに気づき、自分の命を自分自身で守り、さらに周りの人々の命も大切にしようとする態度を養う。

◎地震によって起こる様々な危険から命を守る方法を、図書や関係施設、団体へのインタビュー等から集めることができる。

◎地震から身を守ることを、調査から発表までグループで協力し、おおまかな計画のもとに学習をすすめることができる。

2 単元の構造（指導計画）

社会科 「安全な暮らしを守る」

- ・市内で起きた火災
- ・学校の消防施設
- ・消防署の消火活動

図工 「ポスター作り」「紙芝居作り」

算数 「折れ線グラフ」「資料の整理」

学校行事 「避難訓練」

「越木岩防災の日」

（毎年1月に行われる地域あがでの
防災行事）

国語 「ニュースの時間です」「グループ新聞作り」

「セイフティ・北夙川」

自主防災について話を聞き、調べてみたい課題を見つける。

地震災害から命を守る方法を調べる計画を立てる。

（「学校で」「家で」「登下校中に」、その他のグループに分かれて）

各自の課題にそって、災害から身を守る方法を調べ、まとめる。

（本、インタビュー、現地調査等で情報を集め、必要なものを整理してまとめる）

発表会を開く。

（3年生に「災害から命を守る方法」について伝える）

振り返る。

（わかりやすく伝えることができたか、自分自身も災害に対する心構えができたか、考える）

3 単元展開の概要〈全22時間〉

	主 な 学 習 活 動	教 師 の 支 援
第一次 地域の防災について考えよう！	地域の防災について考えよう！ 1 自主防災会の人をゲストに迎え、自主防災について話を聞く。(2h) ・阪神・淡路大震災のこと ・自主防災とは ・災害の時には 2 防災の日の防災訓練やビデオを見て感想を書く。(1h) ・防災の種類（地震） ・発生の場所	○経験談をもとに話をしてもらい、自主防災について関心を持たせる。 ○災害を自分の問題としてとらえられるよう自主防災会の人たちの話を聞き、危険から身を守る方法に目を向けさせる。 ○地震から自分の命を守る方法に視点を置いた課題となるように助言する。 ○心のケアが必要な児童に配慮する。
第二次 災害から命を守る方法を調べる計画を立てよう！	1 各自が調べてみたい課題について話し合い、グループ作りをする。(1h) 2 グループごとに、災害時において、命を守るための調査計画を立てる。(2h) 方法・手順・まとめ方 3 同一場所の他のグループと交流し合う。(1h) 調べること・調べる方法	○災害発生時の場所ごとにグループを作るよう支援する。 ○グループごとに調査計画を交流し、見通しを持てるようにする。
第三次 災害から命を守る方法を調べよう！	1 計画にそって、資料収集・調査活動をする。(6h) 2 同一課題の発表の他のグループと交流し合う。(4h)	○3年生に伝える。誰に何を伝えるかを意識した活動ができるように学習チェックカードを準備する。 ○同じ課題に取り組んでいるグループの良さを認め、取り入れたり、改善したりする時間を確保する。
第四次 発表会をしよう！	1 発表会の準備をする。(1h) 2 発表会を開き、3年生に「災害から命を守る方法」について伝える。(2h) 3 学習を振り返り、自分の考えを中心にまとめる。(1h)	○発表に必要なものを分担、協力して準備できるよう活動計画カードを準備する。 ○3年生に「わかったよ」「気をつけるよ」等の感想を書いてもらい、学習の振り返りに活用する。 ○伝えたいことが十分伝わったか、自己評価カードを準備する。

4 成果と課題

- ◎自主防災会の方々を招いて、阪神・淡路大震災の話を聞き、自分の課題を見つけることから始めた。話の内容が体験談であり、自分にとって身近な地域の話でもあったので、どの児童も興味深く聞くことができた。
- ◎この学習を通して、防災についての知識を体得するだけでなく、地震は私たちの住んでいる地域でまたいつ発生するかわからないという危機感が持てたようだ。また、どのような危険があるか、どうやって身を守るかを、その場に行き、自分なりに考え、友達と交流し合う中で、防災に対する意識の高まりが見られた。今後、実際に災害に直面したとき

にも的確な判断や行動ができるよう、更に実践的な学習を継続していく必要がある。

- ◎地域で活発に活動している自主防災会の方から話を伺ったり、保護者から震災の体験を聞き取ったり、本校のすぐ向かいにある消防分署で見学や体験学習等をさせてもらったり、また毎年1月に行われる地域あげでの防災訓練「越木岩防災の日」への参加等、地域とのつながりの中で防災学習を進めている。「新たな防災教育」の充実を考えていくとき、「学校」という場だけでは限界があり、家庭・地域と一体となった防災教育こそがこれから求められており、今後一層推進していかなければならない方向と考える。

実践事例8

地域素材・手作り教材を活用した防災教育の取り組み ―紙芝居「馬路川があふれた！」―

揖保川町立神部幼稚園

1 単元設定とねらい

(1) 単元設定の趣旨

幼稚園のすぐ側にある馬路川は、普段水位が低く、穏やかに流れている。しかし、約30年前に起きた馬路川の大洪水では、多くの家が浸水し、多くの人々が避難するという大変な災害が起こった。そこで、実際にあった水害の体験をもとに作成した紙芝居を通して、子どもたちに水害の様子を伝え、自然の恐ろしさ、厳しさや人々の生活の大変さに気づかせ、突然やってくる自然災害への対処の仕方を考える機会にしたいと設定した。



神部幼稚園



西 ← 道路 → 東

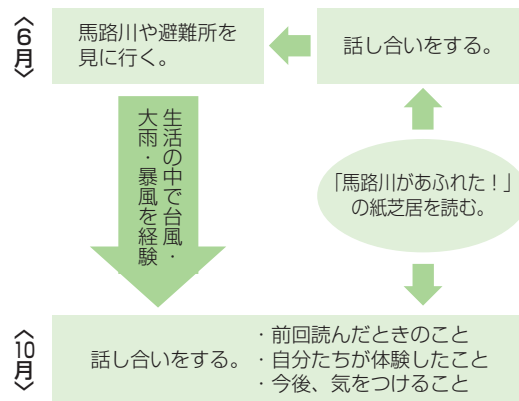


馬路川

(2) 保育のねらい

- ①自然災害の恐ろしさを知る。
- ②水害が起きたら、どうすればよいかを考える。
- ③「自然」は、怖いことばかりでなく、大切な役割をもっていることにも気づく。

2 指導計画



3 手作り教材「馬路川があふれた！」



①現在の郁美の家庭



②約30年前の馬路川の増水と土囊積み



③家の荷物を上げている



④いかだで避難する郁美たち



⑤公民館での避難生活



⑥整備された現在の馬路川

4 保育の展開

(1) 6月の実践 紙芝居を読む。

○もし、馬路川があふれたら、どうする？

(仮定の中で考える)

・「流されてしまう」「おぼれてしまう」

○もし、突然水害が起きたらどうする？

・「大事なものををもって避難できるようにリュックサックに入れておく」と避難袋の準備の必要性を感じていた。ただ、避難袋に入れるものは自分にとって大切なものを考えているので「おもちゃ」が多く、次に「パジャマ」「カッパ」「着替え」と身近なものを口々に答えていた。

○水害になると大変だから、雨は降らないほうがいいのかなあ？

・雨も大事！お日様も大事！水があらな、田植えできひん。

・だってお花が咲かへんもん。「のどかわいた」言うよ。

・おたまじゃくしだって死んじゃう。

(2) 10月の実践 紙芝居を読み、話し合う。



紙芝居を見ている子どもたち



自分の思いを発表

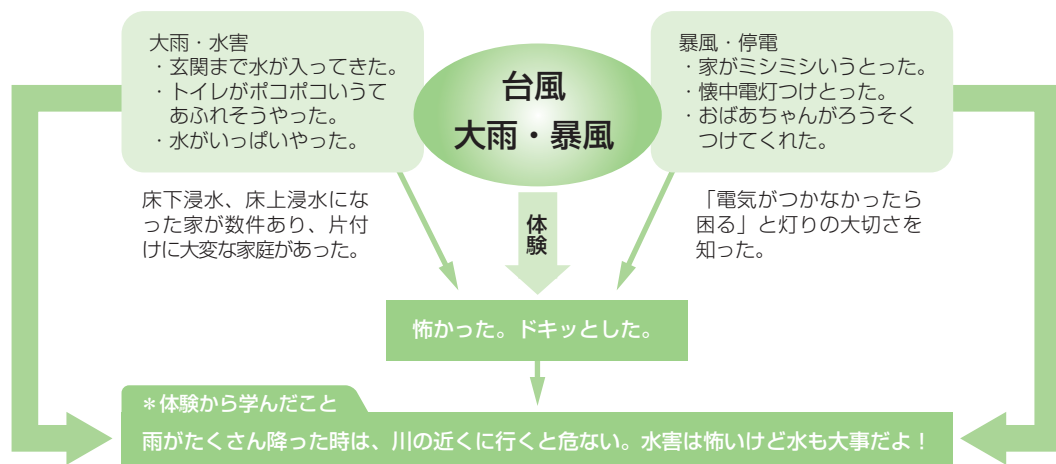
5 成果と課題

○子どもたちは、6月に紙芝居を読んだときは、知識の上で水害を知った。子どもたちは「川があふれるとおぼれるから逃げなあかん」とは理解できても、実際に馬路川が氾濫することは想像がつかないようだった。

しかし、この秋、自分たちが住んでいる地域を台風が通過し、何度も警報が出て台風の恐ろしさを体験すると、子どもたちは紙芝居のできごとと現実の生活が結びついてきた。10月に紙芝居を読んだときには、子どもたちは前回読んだとき以上に水害を真剣にとらえており、浸水被害に見舞われた家もあるなど、台風への対応の大変さもうかがえた。

○停電を経験した子どもたちは、「自分たちの生活に日頃あたりまえにあるものがなくなると困る」ということに気づいた。

○今後も自然災害について地域の方々の話を聞き、①事実を知ること ②日頃から避難に必要なものや心の準備をしておくこと ③自然の大切な役割について考えて生活することなど、防災に対する意識を高めていきたい。



実践事例9

救急車！早くきて!!「命をつなぎとめるために」

篠山市立今田中学校

1 単元設定

篠山市今田地区は高齢者が多く、病院への搬送や通院等の頻度も高くなると考えられるが、山間部ゆえに緊急時の病院への搬送は、都市部に比べ、かなりの時間を要することになる。

このような状況の中で、初期救急活動によって大切な命をつなぎとめるために何が必要で、今後どう改善されるべきかを課題として学習する単元を構成した。

2 ねらい

- (1) 地域社会に目を向けることにより、これまで気づかなかった地域の問題点や改善すべき事象を発見し、解決しようとする態度を育むとともに、地域やそこに住む人々を大切にしようとする心を育む。
- (2) 緊急自動車が登場するまでの時間の短縮や緊急搬送態勢システムの考案、防災体制の整備・充実のための斬新なアイデアを論理的に提案・提示できる力を育む。また、その実現に対する意欲を育む。
- (3) 関係機関（地元駐在所、警察署、消防本部、篠山市役所など）に取材活動を行い、自分が立てた仮説を検証するために調査内容を整理し、レポートを作成する活動を通じて表現力を育む。

3 単元の構造（全30時間）

〔1〕 私たちの地域

- 地域の人口や年齢構成、地理、産業や企業について知る。
- 地域に緊急事態が発生した場合、高齢者に影響が出やすいことに気づく。
- 緊急自動車等の到着に非常に時間がかかることに気づく。

〔活動内容〕 第1時～第6時

- 防災をキーワードに問題点を列挙、取り組むべき課題の設定、問題の解決法・改善策を考察。
- 調査活動の準備・インタビューの内容を確認する。
- アボを取る。

〔2〕 私たちの提案

- 地域に緊急事態が発生した場合を想定し、具体的な改善方法を考えて地域に貢献しようとする意欲を持つ。
- 具体的な資料によって、市や地域の、より正確な状況を把握する。
- 市の防災体制を正確に知る。
- インタビューなどによって、コミュニケーション能力を高める。

〔活動内容〕 第7時～第12時

- 消防本部で調査活動をする。
- インタビューや、いただいた資料などからわかったことをまとめる。
- 到着に時間がかかる場所が目で見えてわかるようにするため、救急車到着所要時間別地図「篠山市命を救う愛の地図Ⅰ」を作成する。



消防本部でのインタビュー



篠山市命を救う愛の地図の作成

(3) 私たちのレポート

- 資料を整理し、根拠を明確にして論理的かつ効果的に表現する力を養う。
- コンピュータや視聴覚機器等を利用して効果的に表現する力を身につける。
- ねばり強く取り組む力を身につける。

〔活動内容〕 第13時～第28時

- 完成した「篠山市命を救う愛の地図Ⅰ」をもとに、本署・分署の形で消防署を運営するには、どの地点にこれらの施設を置けばよいのかを検討する。
- 策定した新消防署の位置で考えた場合、救急車到着所要時間をどれだけ短縮することができるかをシミュレーションし、「愛の地図Ⅰ」同様に彩色し、目で見てわかるようにする。併せて、篠山市内集落別人口地図「愛の地図Ⅲ」を作成する。
- グラフの作成。



完成した「篠山市命を救う愛の地図」

(4) 私たちの発言

- コンピュータや視聴覚機器等を利用して効果的に表現する力を身につける。
- コンピュータのアプリケーションソフトについて理解し、操作に関する基礎的リテラシーを身につける。
- コンピュータの画像処理について理解し、取り込み・加工の技術を身につける。
- インターネットとHP、ダウンロードやアップロード、アップデート等の方法などについて理解する。



グラフ等を活用したプレゼンテーション

4 実践をふり返って

学習を進める中で、次のような成果や課題が見られた。

〔成果〕

- ①災害から多くの人の命を守るための方法を調べたり考えたりすることにより、自ずと命の尊さや人を大切にしようとする心を養うことにつながった。
- ②地域の問題点や改善すべき事象を見出し、それに対応する措置や施策を考えることを通して、自らの危機管理に対する意識や能力(防災リテラシー)を高めることができた。
- ③地域に目を向け、地域に貢献しようとする心の伸張が見られた。
- ④防災に視点を置いて「命の問題」を考えることは、自分と他人、地域や国、ひいては地球規模の問題を考えることにつながり、グローバルなものの見方が身についた。

〔課題〕

- ①効果的に表現し伝えるためのプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の向上が必要である。
- ②取材等でお世話になった方に、取組の成果を伝える方途を考える必要がある。
- ③プロジェクト間・生徒間における学習成果の交流の拡大をはかり共有化をすすめる必要がある。
- ④支援者の研修(課題の設定・検証・整理・発表の方法等)が必要である。

教材開発の視点

地学分野における地域教材の開発

兵庫教育大学教授 西村 年晴

1. 地域素材の発掘と収集

阪神・淡路大震災以後、「新たな防災教育」を推進すべく作成・配布された防災教育副読本を活用して、初期の頃は各学校ごとに工夫を凝らしながら半ば手探りの状態で防災教育の実践が始まった。県下の市町単位もしくは教育事務所単位で実施例がまとめられ始め、平成12年3月には、姫路市小学校安全教育担当者会により安全教育実践報告集が、西播磨教育事務所により防災教育副読本「明日に生きる」を活用した防災教育指導事例集がまとめられている。

学習指導要領の改訂により小・中学校では平成14年度から、高等学校では平成15年度から「総合的な学習の時間」が実施されることになった。「総合的な学習の時間」を実施するにあたっては、身近に見られる教材を活用することが求められている。そこで、各地域にどのような地域素材があるのかが調べられ、平成12年度には東播磨教育事務所が、平成15年度には北播磨教育事務所が地域素材(地域教材)のリストを作成した。

平成12年度に東播磨教育事務所が作成した「東はりま防災教育地域素材集(2000)」は、平成12年6月26日に開催された「平成12年度第1回防災教育研修会」の際に東播磨管内の小学校・中学校・養護学校から防災教育の素材として活用できるとされる学校周辺の素材を持ち寄ってリストを作成したものである。地域素材探しの視点の一例として、「ひと(地域の方で地域の災害や防災計画等(過去・現在・未来)について語れる人など)」、「もの(過去の災害から残された写真・資料・民話など、防災マップ、防災センター、備蓄倉庫など)」、「こと(災害履歴)」が示されている。このとき、管内の学校のうち約3分の2の学校からはさまざまな素材の提出があったが、残りの3分の1の学校からは提出がなかった。その理由として、「現場にゆとりがなく探している時間がない」ことと「どのように探したらいいのか、何が素材になるのかがよく分からない」ことが挙げられている。

2. 実践事例集の発行

平成13年3月には、兵庫県教育委員会により「地域

素材を生かした防災教育実践事例集—『総合的な学習の時間』等を活用して—」が発行された。この事例集には県下の小学校7校、中学校7校及び高等学校2校での実践が紹介されている。これらの事例はいずれも単発のものではなく、年間計画を立てて数十時間を使って、テーマを見つけることから始まり、いろいろな調べ学習を行い、最後の発表会に至るというものである。事例集で紹介されているテーマはさまざまで、自分たちで安全な町づくりを考えるもの、自分たちの町を詳しく調べるもの、地域の災害履歴を調べるものなどである。

3. 野外観察会における地域教材の開発

ちょうどその頃、姫路市の小学校・中学校の理科担当の教員の研修会で、彼らと兵庫教育大学地学教室の教員とが防災教育に関して懇談する機会があった。その際、現場の教員の多くから、「近々始まる総合的な学習の時間で扱うテーマの一つとして防災が格好のものだと思うけれども、地域の教材を見つけることができない」「災害を扱うとすればその内容は地学分野の内容と深く関わってくるけれども、地学分野のことが全然理解できていない」という声が寄せられた。小・中学校の教員、特に小学校の教員には、理科分野、特に地学分野のいろいろな訓練を系統的に重ねた人がきわめて少ないのが現状である。一方、地質学に長年携わり、かつ、指導要領や小・中学校のカリキュラムも理解してしている者にとっては、自然災害に関わる地域の素材を見つけることはそれほど困難なことではない。そこで、姫路科学館を窓口として有志の教員を募って勉強会(野外観察会)を始めた。

姫路市内もしくは周辺で小・中学校の理科のうち地学分野の単元と深く関わる適切な題材を選び、約2か月に1回のペースで十数回野外観察会を開いた。観察会では、地層や岩石のどういう特徴を観察すればどういうことが分かるのか、目の前にある山の形や川の水の流れ方にもちゃんとした意味があること、そのために



姫路市南東部の海岸「小赤壁」での野外観察会

は教員自らが観察をし、意味が理解できたらそれを子ども達に伝えることができるのだということを念頭に置いて勉強会を重ねていった。毎回20数名の参加者で開かれる勉強会を続けるうちに、地層や岩石の観察の面白さと重要性に気づき、熱中する教員が増えていった。そういう教員のうち何名かが兵庫教育大学大学院に派遣されるようになり、地域素材の発掘とその教材化をテーマとして修士論文を作成し、自らの力量を高めた上で作成した生きた教材をもって現場に復帰するようになった。

4. 地域教材開発の成果とその活用

揖保川の河原で見られる礫の組成を上流から河口まで系統的に調べて選択理科の授業で使える教材を開発した中学校の教員、姫路市の中学生全員が参加する引原野外活動センターでの合宿の時に使える教材を開発した中学校の教員を例として挙げておきたい。特に2つ目の教材は、作成した教員が不在の場合に、理科担当以外で地学分野があまり得意でない教員であっても指導できるように配慮して作成しており、大いに活用されるものと期待している。

ここで大切なことは、どこかにある「もの」、もしくはある現象が防災教育のための教材であるという知識だけを身に付けたのではなく、教員自らがテーマを選んで自分で調査・研究をして、その結果に基づいて現場で使えるよう単元内容に即して教材化したことであり、いってみれば応用力ないしは教材を開発する能力を身に付けたということである。そういう力を身に付ければ、地域によって、つまり、分布している地層や岩石の種類によって起こる災害が異なることも理解できるようになる。

今年度、兵庫教育大学では宝塚市周辺の地形・地質・水質を教材化し、実際にそれを用いて授業実践を行いその有効性を確認することができた。特に、地形分野における地域教材として市内のほとんどの中学校で実践できるように複数のコースを設定しており、この教材も大いに活用されるものと期待している。また、神戸市の中学校で「総合的な学習の時間」を用いて災害や防災を学習する際に使われることを想定して、神戸市の自然条件など地域の特徴をふんだんに取り入れたテキストも作成することができた。現在は、姫路市の小学生の多くが利用する施設周辺の地層の教材化にも取り組んでいる。

5. 地域教材の共有化と情報交換

さらに、県から派遣されている教員ではないが、地域素材を教材化するための勉強会が、加西市の中学校の理科教員を対象として平成14年から継続的に開かれている。地域の素材は地域によって異なるものが多いし、逆に、共通するものもあるから、このような勉強会の地道な活動が、地域ごとに、さらには全県下で行われるようになれば、地域素材を生かした防災教育が一層推進されるものと思われる。また、文部科学省が行っている「サイエンスパートナーシップ(教員研修)」という事業が、兵庫教育大学地学教室と姫路市教育委員会の連携のもとで平成14年から実施されており、研修対象地域も姫路市周辺から始めて、兵庫県全体に広がってきている。兵庫県教育委員会と兵庫教育大学が連携して全県を対象としてこのような勉強会を実施することができるようになれば地域教材の発掘・開発がずいぶんと加速するだろうと思っている。

さらに、「サイエンスパートナーシップ」事業で平成15年度に実施した教員研修の際に取り上げた内容(兵庫県の教員ならば必ず来たことのある社町にある兵庫県立教育研修所周辺で観察することのできる地形教材)を映像化する作業を現在進めている。教材テープとして県内の教員が利用できることを目的としており、今年度中に完成する予定である。

防災教育に資するための地域教材に対するニーズが高いのは何も兵庫県に限ったことではない。ここ数年間に限っていえば、宮崎県や青森県から派遣されてきた教員がそれぞれの地域での教材を開発した。近い将来、これらの結果を多くの教員が共有できるようにする仕組みを考える必要がある。兵庫教育大学大学院の修了生は全国に散らばっており、各地の地域教材に関する情報交換の場にするために、数年前に兵庫教育大学地学教室を本部とする「地域教材開発交流支援全国教育研究協議会」という組織を立ち上げたが、この組織を軌道に乗せることを急ぐ必要があると考えている。



姫路市教育研究所での岩石鑑定の実習

実践事例10

ボランティア活動を学校教育の柱に ～地域・保護者と連携して～

神戸市立駒ヶ林中学校

1 ボランティア委員会の設立の経緯とねらい

(1) 設立に至った経緯

わが校区は、阪神・淡路大震災で甚大な被害を受けた地区の一つである。混乱の中で、生徒たちは避難所運営の手伝いや仮設住宅の清掃等に積極的に参加した。生き生きと活動し、また工夫する姿が見られた。このようなボランティア活動を学校教育の柱の一つとして位置づけ継続させようと、平成11年5月に「駒中ふれあいボランティア委員会」が設立された。震災後、さかんになった地域と連携したボランティア活動を、学校生活に位置づけ展開することになった。

(2) 活動のねらい

- ①生徒に活躍の場を提供し、「地域に役立っている」という意識をもたせると同時に、生徒の主体的かつ前向きに取り組む姿勢を育てる。
- ②子ども・高齢者・障害のある方とのふれあい体験を通じて、他者を思いやる心、互いに支え合う態度を養う。



ボランティア委員会で活動案を検討中

2 ボランティア委員会をはじめとした活動

(1) 委員会の組織

本校は、長田区社会福祉協議会にボランティア団体として登録。生徒全員が会員になっている。ボランティア委員は立候補制とし、毎年全校生徒の15～20%にあたる30～40名の生徒が自主的に運営している。ボランティア委員会は次の3班体制で運営している。

①企画・運営班

地域からの活動依頼を検討し、自分たちの意見や案を取り入れ活動内容を決めていく。

②集めるボランティア班

募金活動等の企画立案を行う。昨年は、イラン地震の募金を行った。

校区内の二葉小学校にもよびかけて連携して、駅前や商店街で募金活動をおこなった。2日間の活動であったが、延べ80名の本校生が参加した。

③掲示・モザイク班

全校生徒が、行事や学校生活に前向きに取り組んでいくことをねらいとし、スローガンを募集し、本校玄関前にモザイクで文字を作り、全校生徒の意識の高揚を図っている。

(2) 地域と連携した活動

本校校区および周辺地域は、新長田南地域開発事業にみられるように、地域ぐるみで「住みやすい街づくり」をめざしており、本校もその取組の一翼を担っている。これまでの活動の積み重ねを通して、多くの団体との協力体制ができてくる。



スローガン完成

- ①長田区ボランティアセンターを中心としたボランティア活動のネットワークに本校も参加し、多くの共働作業所や団体と連携して活動してきた。
- ②地域の「安全マップ」や仮設店舗を利用した「手作り植木鉢の販売」など、地域商店街組織と協力しながら活動を行えるようになった。
- ③校区内の長楽・二葉両小学校や青少協・老人会と連携したふれあい交流や広報活動に取り組んでいる。

3 これまでの活動内容

(1) 昨年の取組状況

①地域・団体からの依頼でボランティア委員会が中心となって企画・運営して行った活動

・「七夕まつり」「もちつき大会」など、毎年10件程度の活動依頼があるが、昨年は延べ261名の生徒が参加、意欲的に活動した。全校生徒が200名であることを考えると、意識は高いといえる。

②「総合的な学習の時間」などを活用して各学年が創意工夫して取り組んだ活動

・1年…「1. 17kobeに灯りをinながた」でろうそく作りを行った。

・2年…「トライやるアクション」の取組として2学期に



生徒が講師になって地域の人々とカレンダー作りに励む

共働作業所の方の指導で植木鉢を作り、それにパンジーの苗を植えて販売したり、地域の清掃やお年寄りの肩もみなどの活動を意欲的に行った。

③吹奏楽部や駒中太鼓が積極的に参加した活動。

(2) 活動の様子

生徒たちは、学校生活の中では見られないような生き生きとした表情で意欲的に活動した。幼児やお年寄りには、笑顔でやさしく接している。生徒の活動ぶりを見た地域の人たちから、「元気に、よく動いてくれます」と言っていた。『ほめられたい』という気持ちが、生徒を生き生きと活動させる要因になっている。



「ながたゆきまつり」に参加



仮設店舗で販売活動

4 成果と課題

(1) 生徒の感想

「肩もみをされていて、おじいさんやおばあさんに『すご気持ちいいわ、ありがとう』と言ってもらった時、恥ずかしさを忘れてうれしくなり、がんばろうという気持ち

ちになれた」

(2) 地域の方の感想～投書から～

「いつも元気がよくてハキハキしており、そういう姿を見るとこちらも元気になりました。今後も、がんばってください」

(3) 活動を通じて、本校教師の感想

「地域の商店街の方々から励ましの声をかけていただき、また多くの方が喜んでくださる中で、生徒たちが感謝の気持ちや人の温かさを実感できたと思う」

「活動を通じて、人前で話すことに自信をもてるようになった生徒が増えた」

「生徒が、地域に役立っていると感じ、がんばろうとする姿勢が見られ、落ち着いた学校生活を送れるようになった」

(4) 今後の課題

平成10年から3年間、本校は文部省より、「道徳的実践活動推進事業」の指定を受け、今日まで生徒たちに様々な体験活動の場を提供し、前向きに取り組む生徒の育成にそれなりの成果を上げてきたと自負している。

しかし、今後この活動を継続・発展させていくためには多くの課題を抱えている。

一つは、地域と連携して活動するには、計画・調整等かなりの労力が必要である。教職員数が減少していく中で、本校独自の教育活動だけでも多忙を極めている現状に加え、体験活動を企画していかねばならない。ボランティア委員会設立当初のメンバーが少なくなりつつある現在、生徒の活動に対する教職員の十分な理解と協力体制が問われている。

二つめは、「活動の質を高める」ことである。地域からの依頼を受けて活動する形態から、「生徒たちにとっての充実した体験とは何か」。計画・立案・運営に、もっと積極的に生徒たちを参加させ、体験を創り上げる喜びを一層感じさせたい。そういう意味では、昨年の「トライやる」アクションの取組は、その萌芽といってよいだろう。教職員の役割は、生徒の活動のお膳立てを行い、生徒たちをその気にさせることである。

それぞれの生徒が、学校での自分の居場所を見つけ前向きにがんばる生徒になることを願っている。

実践事例11

阪神・淡路大震災追悼式を自分たちの手で

芦屋市立精道小学校

1 はじめに

阪神・淡路大震災追悼式は、精道小学校にとって特別な意味のある学校行事である。精道小学校は、阪神・淡路大震災で多くの犠牲者がでてしまった学校でもあり、追悼式は毎年「命」の重みを考え直す機会として大切にされてきた。

その追悼式も、震災10年目。転入生も多く、記憶にとどめている子どもも少なくなってきた。そこで、従来は教師が中心になって企画し実施してきた追悼式を子どもたちの手で実施する活動を通して、より命についての学習を深めたいという願いから、「総合的な学習の時間」の学習の大きな流れの中で子どもたちが取り組むことになった。

2 追悼式までの流れ

- ①総合的な学習「人として輝くために」の学習に続いて、命のことを考える機会である追悼式を6年生が手づくりすることの意味について話し合う。
- ②学年全体で当時の様子を思い出したり、被災した人の手記を読んだりしながら地震について学習する。
- ③学級を解体して新しいグループを作り、どんなことをしたいか、また、どんなことならできそうか考える。
- ④グループごとに調べ学習を始める。
- ⑤追悼式の意味や地震の恐ろしさについて低学年に伝える。
- ⑥追悼式を迎える準備をする。
- ⑦追悼式を実施する。

3 グループ分けについて

- ・児童が調べたいと答えたことを中心に、教師が大まかなテーマを考えて提示した。
- ・教師も指導を分担したかったのでクラスをシャッフルして新しいグループを作った。児童の希望を優先し、それ以外は、教師が大まかなテーマごとのメンバーを決めた。グループ内での分担は児童で話し合って決めた。

4 活動の様子

①献花

献花の意味や献花の方法を調べ、まとめる。献花の見本を手づくりし、献花づくりを保護者に依頼する手紙を作成し配布した。また、追悼式の後に、献花を燃やす会の世話もした。

②黙祷

何を考えながら黙祷するのか、何のために黙祷するのか、どんな方法で行うのかについて調べ、まとめた。実際に黙祷をして見せたり、「黙祷」という表示を作成したりして分かりやすく工夫した。

③校区の被害状況

震災資料室を活用し、さらに市役所の防災対策課に行き資料や写真を借りてきた。震災を体験した先生の話も合わせて、当時の状況を図表などにまとめた。当時の復興クラブの先輩たちが作った写真パネルも活用した。

④避難所としての学校の様子

体育館・運動場・校舎・ボランティアの各グループに分かれて調べていった。主に震災資料室の写真パネルや当時の新聞記事、当時実際に使われていた炊き出しを知らせるダンボール掲示板などを参考にした。2年前に、当時6年生だった先輩から詳しく話してもらった内容も思い出しながら原稿にまとめていった。他にも震災を体験した先生の話や自分の当時の記憶も交えて、具体的なことを紹介しながら、わかりやすく伝えるように工夫し、避難所として大切な役目を果たした精道小学校の様子をまとめた。

⑤祈りの碑

祈りの碑の形の意味、建てられた経緯、建立の時期や場所の選定理由など、碑について詳しく調べた。碑をデザインされた当時の先生のビデオを見たり、刻まれている文字を実際に確認したりした。また、毎月17日にこの碑にお花をお供えてくださる散髪屋さんインタビューに行き、お話をお聞きした。自分たちで撮った写真や模型を使って分かりやすくまとめた。

⑥亡くなった人

震災で亡くなった当時の児童8人の学年・名前と6人の保護者のお名前を正確に記録した。亡くなった状況や親子、兄弟、家族など、一緒に亡くなった方も

記録した。その中で、当時1年生だった米津漢之君のご遺族にお話をうかがう計画を立て、直接インタビューさせていただいた。震災の前の日に漢之君が書いた「先生あのね」を読み、明日を楽しみにしていた漢之君に明日が来なかったことを締めくりの言葉としてまとめた。

⑦ 追悼式式典

これまでの追悼式の体験や記憶をもとに、「どんな式にすればよいか」意見を出し合った。そんな中で、従来の追悼式にはなかった以下のような内容を取り入れた流れを考えていった。

- ・ リコーダー演奏にかぶせて6年生の取組の説明を入れる。
- ・ 手づくりのいちご大福をお供えする。（「総合的な学習の時間」とのつながり）
- ・ 遺族代表の児童の追悼文に続いて、家族を亡くした児童の呼びかけを行う。
- ・ 司会、誘導など、子どもたちで役割を分担する。

5 追悼式を終えて

子どもたちは、「総合的な学習の時間」に位置づけて追悼式を自分たちの手で実施するという貴重な体験をした。これは本校で初めての取組となった。

献花を担当した子どもたちは、冬休みの前に各クラスに行って手順を説明した。式典当日の進行を担当するグループ以外は、1月13日に各クラスへ調べた内容を伝えに行く時間を持った。1、2年生は各クラスごとに、3年生以上は学年集会を持って学年ごとに聞いてもらった。冬休みまでに調べ活動を終えて内容を暗記してくるようにしたが、ほとんどの子どもは自分の担当する内容をしっかり覚えていて、下を向かずに堂々と発表することができた。子どもたちには、追悼式を自分たちの手でやりたいという意気込みも感じられた。当初は本当に子どもたちだけでできるのか心配であったが、子どもたちの手にゆだねて得たものは大きかったと感じている。命について真摯に考えるよい機会となった。

〈児童の感想文より〉

今日は一日早い追悼式でした。朝から寒くって追悼式も寒いだろうなと思ったけど、寒くてもきちんとした態度で臨もうと決めていたのでそういう心で追悼式に参加しました。震災で家族を亡く

した4人の話を聞くと、3才という幼いときに大切な家族を亡くして本当にかわいそうだなと思わずにはいられませんでした。普段元気な4人なので私はそういう気持ちがあったことを今日知ることができました。…中略…献花をするとき献花係のせいかみんなどんな献花をしているのかすごく気になりました。見ると丁寧に作っていたり、折り紙以外のものでもきれいに作ってあるのを見てすごいなあとも思ったし、私たちの発表がきちんと届いたんだなと改めて思いました。その時はなんだかうれしかったし、発表してよかったという気持ち、そして「追悼式」に献花という形で関わってよかったという気持ちでいっぱいでした。今年の追悼式は6年生として完璧だったと思います。来年からは参加できないけれど、亡くなった人たちのためにも来年もいい追悼式になるといいなと思います。そして明日もう一度家族で黙祷しようと思います。



「祈」の碑



震災で亡くなった6人の友の霊前に、手づくりの花をたむけ、めい福を祈る。

実践事例12

震災メモリアル ～山手のつどい～

加古川市立山手中学校

1 行事の概要とねらい

多くの尊い命、大切なものを一瞬にして奪い去った「阪神・淡路大震災」。あの日から9年目の1月17日を迎えた。

「震災メモリアル～山手のつどい～」は、震災で亡くなった人々への追悼とともに、震災が教えてくれた「命の尊さ」「思いやりの心」「協力して生きることの大切さ」を風化させることなく、これからに生かしていくための「試みの場」でもある。

こうした中、「阪神・淡路大震災」への思いを『震災絵巻』や『灯籠』にして表し、全校生が集う活動を通して、前述のねらいを体得させることを目指した。

2 行事の展開

- (1) 震災の直接的な被害があまりなかった私たちの地域。しかし、大震災が起こったあの日を思い出す中で、生徒たちからも「被災の状況や特徴はどうであったのか。そして、今はどうなのか」「ライフラインが途絶えた苦しい生活の中で、どのように助け合ったのか」「災害の中で生き抜くために、人間として最も大切なことは何だろうか」といろいろな意見が出され、話し合った。

そうする中、自分たちの気持ちを形にして表したいということで、1年生は『震災絵巻』、2年生は『灯籠』を、それぞれ制作することになった。

- (2) 1年生181名が、100メートルのロール紙に「大震災」で犠牲となった人々を思い浮かべながら、クラスごとに〈揺れる〉〈壊れる〉〈奪われる〉〈結ぶ〉〈立ち上がる〉のテーマを決め、『震災絵巻』を制作した。生徒一人ひとりがテーマにそって、35人ほどの顔を墨で描いた。生徒全員が描いた顔の

数は、震災で亡くなった6,433人で、「苦しい顔」「悲しい顔」「やさしい顔」など、表情もさまざまであった。「絵巻づくり」を通して、「生命の尊さや重み」「思いやりの心」



『震災絵巻』と『灯籠』が飾られた舞台

「支え合うことの大切さ」を実感した。

- (3) 2年生191名が、震災の犠牲者への追悼と復興への願いをこめて、クラスごとに〈建物〉〈ライフライン〉〈交通〉〈自然〉〈学校〉のテーマを決め、灯籠(高さ20cm)と燭台(高さ5cm)を焼き物にしてつくった。

生徒一人ひとりがテーマに沿いながら、思い通りに粘土のひもづくりで成形し、素焼き・釉掛け・本焼を行った。体育館の床に並べられたこの灯籠に、神戸東遊園地の「希望の灯り」が分灯され、温かい灯りが広がる中で、あらためて震災の重みと意味を実感することとなった。

- (4) 「震災メモリアル～山手のつどい～」には、地域の人々もたくさん参加された。体育館壁面には1年生の『震災絵巻』、その下に2年生の手になる『灯籠』に「希望の灯り」から分けられた灯りがともされた。

3年生は、「追悼の思い」と「復興への願い」、そしてそこから生まれた「支え合うところ」を、詩「なんとか元気をやっています」に託して朗読した。そして、NPO法人阪神淡路大震災「1.17希望の灯り」の加藤いつかさんから震災の体験談を聴き、全校生573名は、「命の尊さ」を胸に刻んだ。

3 成果と課題

生徒たちの感想を見ると、震災の「凄まじさ」や「悲惨さ」をひしひしと感じるとともに、「命の重み」や「思いやりの心」を持って生きることを学び、この大震災を風化させてはいけないという決意を、新たにしように思われる。

〈生徒の感想〉

「希望の灯り」から受け取った火は、普通の火よりも熱く感じた。その火には、たくさんの人たちの思いが入っていて、火を持つことに責任を感じた。火と火がつながり大きくなって、震災の面影を映しつつ、私たちの行く手を明るく照らしているようだ。



震災の教訓を胸に刻む生徒たち

実践事例13

防災参観日について

福崎町立福崎小学校

はじめに

本校が防災授業に取り組みはじめたのは、阪神・淡路大震災の翌々年1997年からである。

震災以前は地震を想定した避難訓練だけだったが、震災を機に防災の参観授業と児童の引き渡し訓練を、毎年1月に位置づけて取り組むようになった。また、2000年には福崎町あがての総合防災訓練を本校で行った。

大切なことだが、ついつい後回しになりがちな防災教育を参観授業に設定し、1月の参観日に全教員が、防災をテーマとした授業に取り組んできた。

1 防災参観日について

8年間続けて、防災参観授業・避難訓練・児童引き渡し訓練を行っている。

- ・ 1997年～1999年及び2001年～2002年 1月末の土曜日
- 2003年～2004年 1月末の金曜日午後
防災参観授業・避難訓練 児童引き渡し訓練
- ・ 2000年1月16日(日)8時～11時
福崎町総合防災訓練
福崎小学校・中播磨消防署・福崎警察署
福崎郵便局・県消防防災航空隊・その他

2 防災参観授業の内容

①震災の関連施設見学を通して

4年生 野島断層の見学の発表会

北淡町震災公園で野島断層を見学し、語り部の方から伺った話など

5年生 山崎防災センター見学の感想報告会

6年生 人と防災未来センターでの学習成果の報告会

②震災に関連するゲストティーチャーを招く

5年生 実際に震災の時にボランティアとして活躍された方の話を聞く

③保護者を巻き込んで

4年生 各地区の危険場所の発見

6年生 地域の防災マップ作り

④実物・具体物から学ぶ

1・2年生 防災グッズの名前や使い方

3年生 防災器具の使い方

⑤震災読本「明日に生きる」を使って

各学年 防災教育年間カリキュラムに位置づけた授業

⑥不審者から身を守る

4年生 警察庁子ども防犯テキスト「みんなで気をつけようね」を使って

3 成果と課題

防災授業を毎年実施する中で、少しマンネリ化してきていることは確かである。高学年ともなると同じことの繰り返しになる場合もある。しかし、それでもいいのではないかと考える。1年に1回ぐらい、教師や子どもが震災のことを思い出し、振り返って授業をする中で、大震災を意識の中に残して、風化させてしまうのを防いでいるように思う。

きちんとした縦のカリキュラムを作成するのも一案だが、「総合的な学習の時間」と同じで、同じテーマを扱っても、各学年で学習することが少しずつ違ってくように、その時の教師の取り組み方によっても大きく左右されるものであり、何回も繰り返すことで効果が期待できる。

毎年、年が明けると、本校の教師は今年はどんなことをしようかと、資料集めや施設見学のことで頭を悩ませている。しかし、毎年新しいことをする必要もない。いつ何時、自分の所に地震が起きるのかわからない地震国日本に住んでいる限り、1年に1度の危機管理の意識づけになっているように思う。

子どもたちの意識の中で、少しでも震災に学び、自分の命を自分で守ろうという気持ちが育ってくれたらと願っている。



社会教育施設の活用1

阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」―阪神・淡路大震災から学ぶ―

はじめに

1995年1月17日午前5時46分52秒、淡路島北部を震源として発生した地震は、阪神・淡路の各市町等に、6,433人の犠牲者を初めとする甚大な被害をもたらしました。

阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」は阪神・淡路大震災の経験とそこから学んだ教訓を後世に継承し、災害による被害の軽減に貢献するとともに、その基本となるいのちの尊さや共に生きることの素晴らしさを伝えるため、国の支援を受けて兵庫県が整備した施設です。

平成14年4月に大震災の経験や教訓を伝える1期施設「防災未来館」が開館し、多くの小・中学校、高等学校の修学旅行、校外学習の場としてご利用いただいていたのですが、平成15年4月には、いのちの尊さと共に生きることの素晴らしさを発信する2期施設「ひと未来館」が開館し、大震災の発生直後から復興が進む現在までの姿とともに、震災で学んだ「いのちの尊さと共に生きることの素晴らしさ」を一体的に発信できる施設となり、これまでに120万人を超える（H17.1末）多くの方々にご来館いただいています。

また、非常に大きな被害を受けた神戸市長田地区（被災地のまち歩きなどの体験学習ができます）や神戸港の被害状況を保存した神戸港震災メモリアルパークにも近く、世界一の吊り橋明石海峡大橋を渡れば、大震災の震源となった断層を当時のまま保存している野島断層保存館もあり、人と防災未来センターとセットで訪れることによって地震や防災について総合的に学ぶことができます。

1 防災未来館の概要

「防災未来館」では、大震災発生直後から復旧・復興が進む街の様子や貴重な資料等を展示しています。

(1) 1.17シアター

5時46分に何が起こったのかを、特殊撮影やCGの映像で再現します。マグニチュード7.3の地震動で破壊され燃え上がる街の様子を、不定形多面体スクリ

ーンの映像や立体音響システムなどにより、臨場感高く表現しています。観覧された被災者の方からは、「辛い経験を思い出させるが、県外や県内でも震災を体験したことのない方々にぜひ見てほしい」との声が寄せられています。

(2) 震災直後のまち

崩壊した病院、垂れ下がった高架の線路など、本物そっくりに再現された、臨場感あふれる震災直後のまちの中を歩いていただきます。

(3) 大震災ホール

大震災で姉を亡くし、家を失った震災当時15歳の少女が、悲しみ、悩みながらも、ボランティアや地域の人たちとふれあうなかで生きる力を取り戻し、このまちと生きていくことを決意するまでの姿を、彼女の回想の形で描いています。震災の悲劇と、復興の歩みを市民の視線から伝えており、「何度見ても感動する」との声を多くいただいています。

(4) 震災の記録を残すコーナー・震災からの復興をたどるコーナー

被災された方々等から提供いただいた16万点に及ぶ資料の一部や、各種データなどで、震災から復旧・復興に至る過程を展示しています。地震直後から復興に向けての人々の暮らしやまちの姿等について、それぞれトピックスを抽出し解説します。トピックスごとに映像、ジオラマ模型、検索映像、グラフィックなどでわかりやすく解説しています。各展示物にバーコードが付けられており、バーコードナビゲーターと呼ばれる携帯情報端末を使って関心のある分野を深く調べることができます。バーコードナビゲーターで検索したデータはプリントアウトして持ち帰ることもでき、「学校へ帰ってから各自が調べた分野の発表会を行うことができ、事後学習にも最適」との評価をいただいています。

(5) 防災情報コンテナ・防災ワークショップ

阪神・淡路大震災のみならず、広く地震や災害の状況、市民・行政の取り組みなど、災害や防災に関する最新の情報を発信するコーナーや、災害・防災に関する実践

的な知識を、小学生などにもわかりやすく、パズル・実験・ゲームで体験しながら学べるコーナーがあります。

2 ヒト未来館の概要

「ヒト未来館」は、「いのちの尊さと共に生きることの素晴らしさ」の根源を知り、学習するために「いのち」をテーマに、「自然」「人」「コミュニケーション」のステージに分け、単に展示を見ていただくだけでなく、インストラクターとの交流を楽しんでいただく多彩な参加型の展示も用意しています。

(1) こころのシアター

大型立体ハイビジョン映像と風や振動、耳元でささやくような音響などが一体となった臨場感あふれるシアターです。一本のユリノキに生まれた「葉っぱのフレディ」が、美しく、時には激しく変化する四季の中で経験し、さまざまに思いをめぐらす物語。その姿を通して、いのちに対する慈しみや、生きる勇気を描き出します。

(2) ブナ林の四季

ブナ林の四季の中で繰り返される“いのちの再生と継承”をテーマに、美しい静止画像と照明、音楽、造形メカを駆使した大型映像「ブナ林の四季」が上映されます。上映が終わると、インストラクターが自然の中にあるいろいろな話を分かりやすく説明してくれます。また、インストラクターは来場者と楽しく語ってくれます。

(3) こころとからだの部屋

こころとからだのしくみを知ることで、「いのちの本質」を知ることがテーマとなっています。メインシアターでは、脳のさまざまな働きを見る「脳の機能と神秘」や「創造性」「感情」「悲しみ・怒り・不安・恐怖」「恋愛」などのテーマの映像が上映されています。

また、インストラクターが私たちの生活の中で気になる健康に関することやストレス解消法などについても楽しく話をしてくれます。

(4) やすらぎの部屋

芳香・映像・音響・照明の4要素を合体させた技術的にも新しい試みのリラクゼーション空間です。「こころとからだの部屋」で、こころとからだのしくみを知り、

やすらぎや癒しが大切なことが分かった後は、森や花畑をめぐる映像詩で実際にその状態を体感していただきます。

(5) 交流の広場

みんなで音の世界を楽しむことで、こころの共鳴をつくり、新しい仲間との輪を広げる「ひろば」です。「ひろば」では、中央に設置されたセンサーオブジェ(ホロン)とコンピュータ制御された作曲プログラムを使って、インストラクターと来場者が、さまざまな音楽を作曲し演奏する「みんなで音楽をつくろう」というプログラムが展開されます。

3 学習プログラム

人と防災未来センターでは、展示施設に加え、震災・防災学習のためのメニューとして、震災体験者である「語り部」が自身の体験と防災への心構えなどを語る「被災体験談」や小・中学生を対象としたセンター研究員による防災セミナーを用意しております。

特に、語り部の体験談は、震度7の体験、崩壊する街の様子、逃げ惑う住民、必死の救助、市民による消火活動、避難所の様子、極限下の教訓、復興への活動、ボランティアの思い、被災者の思い、様々な「その時」を生で聞くことができる貴重な体験として、多くの学校をはじめとする団体のみなさまにご活用いただき、ご好評をいただいています。

また、防災ワークショップでは、災害・防災に関する実践的な知識を小学生などにも分かりやすく、実験やゲームで体験しながら学ぶことができます。ボランティアの解説による「免震構造装置」や「液化化現象装置」の実験装置もあります。

今後も大震災の経験や教訓を様々なかたちで発信していきます。



「語り部」の「被災体験談」の様子

実践事例14

人と防災未来センターを見学して～私たちの安全な暮らしを守るために私たちにできること～

夢前町立置塩小学校

はじめに

私達の町、置塩小学校区には山崎断層系・暮坂峠断層が走っており、阪神・淡路大震災の後、「この辺りに、いつ大地震が起こっても不思議でない」と言われている。

そんな折、中播磨地域ビジョン委員さんより「校区全体で総合防災訓練を実施する必要がある」とことが提案された。

そこで、「平成15年1月17日（金）午前10時、この辺りに大地震が発生した」との想定の下、幼稚園児、小学校児童、地域住民（PTA、自治会、消防団、老人会、婦人会）、中播磨消防署、警察（駐在所）、夢前町役場等、約500人の参加により、避難所（置塩小学校）への避難訓練、避難者受け入れ訓練、仮設トイレ設置訓練、消防署による児童救助訓練や放水訓練、消火器による消火訓練、炊き出し訓練、地域防災リーダー養成講座、震災ビデオ視聴、小学校児童震災フォーラム、児童引き渡し訓練を実施した。

実施後の反省会で「児童の発表の場を設定できないのか」「地区ごとの防災マップを、子どもと一緒に作ってはどうか」という意見が出された。

そこで、第2回目となる、平成16年1月17日（土）実施の置塩小学校区総合防災訓練を前に、本校4年生が「総合的な学習の時間」に「人と防災未来センター」を見学し、防災について学習する計画を立てた。

(5) 展開

学 習 活 動	活 動 の 支 援 と 留 意 点
1 人と防災未来センターで学んできたことをテーマごとに発表する。 テーマ ・体験者からのお話を聞いて。 ・自分たちの疑問とその答え。 ・ワークショップで学んだこと。 ・人と防災未来センターを見学して感じたこと。 2 家庭でとったアンケート結果をテーマごとに発表する。 テーマ ・自分たちの命、町を守るために、どうすればいいか、提案する。	・ポイントをしっかりとおさえている発表者を評価する。 ・聞いている児童に「聞き取りシート」を持たせ、要点をつかむ聞き方ができるよう助言する。 ・「体験者の話」や「見学して感じたこと」のところでは、教師も発表児童や被災者の気持ちに共感し、豊かな心情が育つよう支援する。 ・集計の結果を上手に要約して発表できるよう助言する。 ・グラフに表すなど、わかりやすい表現をしている発表者を評価する。 ・自分の身近な出来事として感想やつづきやきが出たら全体に広める。
地震に備え、どんなことができるだろう	
3 自分たちの命、町を守るために、どうすればいいか、提案する。 4 次時の予告	・どのような備えをすればいいか、フリートークの形で話し合う。 ・可能な限り、児童の意見を尊重し、意欲を高める。 ・自分たちにできることは何か、具体的にどう取り組むかについて、次時に考えることを知らせ意欲を高める。

この単元全体を通して学習した成果を、平成16年1月17日（土）の置塩小学校区総合防災訓練において発表した。参加者から「4年生の学習発表はよく調べられていて大変良かった」「地震に対する考えが身

1 第4学年1組

総合的な学習の時間（防災教育）学習指導案

(1) 単元

私たちの安全な暮らしを守るために私たちにできること

(2) 単元の目標

自分たちの住んでいる町に地震が発生した時に備え、安全な暮らしを守るために、平素からどのようなことに心がけ、どのような備えをしなければいけないのか主体的に考え、実行を通して、防災意識を高める。

(3) 指導計画（15時間）

第1次 「人と防災未来センター」を見学する。（4時間）

第2次 町の人たちの地震に対する思いを調べ、まとめる。（6時間）

第3次 地震が起こった時、どんな備えが必要か、考える。（2時間）

第1時 地震の備えには、どんなものがあるか、考える・・・本時

第2時 地震の備えの内、自分たちにできることは何か、考える。

第4次 自分たちが考えたことを実行し、地域の人たちに広める。（3時間）

(4) 本時の目標

人と防災未来センターを見学し、学んできたことを思い起こし、地震から自分の命、自分たちの町を守るための備えとして、どんなことができるか、考える。

・ポイントをしっかりとおさえている発表者を評価する。
・聞いている児童に「聞き取りシート」を持たせ、要点をつかむ聞き方ができるよう助言する。
・「体験者の話」や「見学して感じたこと」のところでは、教師も発表児童や被災者の気持ちに共感し、豊かな心情が育つよう支援する。

・集計の結果を上手に要約して発表できるよう助言する。
・グラフに表すなど、わかりやすい表現をしている発表者を評価する。
・自分の身近な出来事として感想やつづきやきが出たら全体に広める。

地震に備え、どんなことができるだろう

・どのような備えをすればいいか、フリートークの形で話し合う。
・可能な限り、児童の意見を尊重し、意欲を高める。
・自分たちにできることは何か、具体的にどう取り組むかについて、次時に考えることを知らせ意欲を高める。

近なものになった」という声が聞かれた。

4年生の子どもたちが発表した内容は次の通りである。（一部または概要）



「人と防災未来センター」で学んできたことを発表する子どもたち

2 児童の発表内容

(1) 1.17シアターを見た感想文の朗読



「置塩小学校区総合防災訓練」において、考えたことを発表する子どもたち

「画面いっぱいの映像が出て、こわくてしゃがんでしまいました。悲しい映像が流れた時は、妹が入院したことや骨折したことが思い出されてとても悲しくなりました。もし、家族一人でも死んだら悲しくなります。だから、地震がきてほしくないと思いました。けれど

地震はいつ、どこで起きるかわからないから、人と防災未来センターへ行って覚えてきたことを思い出して、家でもためてみようと思いました。家族が死なないように家でも心がけていこうと思いました。」

(2) 震災を経験されたおじさんの話の紹介

「地震は約10秒から15秒ぐらい続きました。地震で死んだ人は約6,000人以上です。そんな大きな地震がくるとは思わなかったから家のがんじょうじゃなかったの、古い家が全部こわれてしまいました。」

(3) 見学シートの疑問とその答えの発表

- ・ どうやって地震は起きたか？
- ・ 何戸ぐらいの家が全壊、半壊したか？
- ・ どうして新しい家はつぶれず、古い家がつぶれたか？
- ・ マグニチュードと震度はどう違うのか？
- ・ 阪神・淡路大震災でなくなられた人は、何人か？

事前にこのような質問を用意し、説明を聞いた。

(4) 震度と被害を表にまとめて発表

(5) 家具の置き方の発表

- ・ 出入口付近にタンスなどを置かない。出られなくなるから。
- ・ ベッドの横にタンスなどを置かない。下じきになるから。
- ・ 部屋の角にななめに置かない。倒れやすい。
- ・ タンスや食器棚は部屋の角に置く。

(6) アンケート結果の発表

アンケート項目

○「防災や避難について、家族みんなで心がけたいことや子どもたちに希望すること」

- 第1位 火の始末。地震がきた時、火がついていたら、すぐ消すこと。 17人
- 第2位 家族で避難先を決めておく。バラバラになっても、また会えるから。 10人
- 第3位 非常時に必要な物を用意しておく。 4人
- 第4位 あわてない。火事になった時、落ち着いて行動する。 2人

その他のアンケート項目

○「非常の時に持ち出す物を用意しているか」

○「非常の時、家族で集まる場所を決めているか」

○「寝ている部屋の壁に危険な物はないか」

【感想の発表】

「私たちは人と防災未来センターへ行って、いろいろなことを調べました。第1位の火の始末はやっぱり大切だとわかりました。第4位の「何もしていない」人は、もし地震がきたらみんなと離ればなれになってしまいます。それに、非常食がないと、多分体が持たないと思います。」

(7) 校区内の危険な場所について発表

3 成果と課題

この学習の成果が「自分たちの生活の中にどれだけ生かされているか」について、児童に聞いたところ、次のような回答があった。

- ・ 家族で地震について話し合った。(家具の固定、集合場所など)
- ・ 防災用グッズが入ったリュックを置いている。
- ・ 非常食としてカップラーメンや乾パンを置いている。
- ・ 家具や家電製品を固定している。
- ・ 寝る部屋には、タンスなど危険な物を置かないようにした。

多くの家庭において、以上のような具体的実践がなされているのは、児童が学習の成果を家族に伝え、家族がそれを受け止めた結果であると考えられる。また、地域をあげて取り組んでいる総合防災訓練の成果であると思われる。

平成17年1月には本校区第3回目の総合防災訓練が計画されており、「起震車」による地震震動体験もできる予定である。全児童が総合防災訓練に参加する中で、児童の防災意識を一層高めていきたい。

社会教育施設の活用2

北淡震災記念公園—阪神・淡路大震災の原因、野島断層を保存展示—

1 北淡震災記念公園とは

北淡震災記念公園は野島断層を保存展示する野島断層保存館、断層のすぐそばにありながら壊れなかった民家・メモリアルハウス、地震の体験ができる震災体験館、学校団体等の学習・資料閲覧のためのセミナーハウス、さらには北淡町の震災犠牲者の碑や復興への心意気を表した「べっちゃんいロック」、防災用品等を購入できる物産館、レストランなどの施設があります。総面積は3.4 haです。

平成7年1月17日午前5時46分、明石海峡付近を震源とする兵庫県南部地震が発生しました。この地震は典型的な都市直下型地震で、神戸市や阪神地域および淡路島北部を中心に、阪神・淡路大震災と呼ばれる戦後最大の甚大な被害をもたらしました。この地震は六甲から淡路にかけての活断層が活動し



べっちゃんいロック

た結果起こったものであり、野島断層に沿って約10kmにわたって地面の食い違いが出現しました。そのうち185mが国の天然記念物に指定され、北淡震災記念公園で見ることができます。

2 各施設の概要

(1) 野島断層保存館

野島断層のうち約140mを屋内で保存しています。館内では地面の大きなずれや生け垣のずれ、大きな亀裂など断層による様々な地形の変化を見ることができます。館内西端には断層を2.5m掘り下げ、断層の地下部分や断面を観察することができるトレンチがあります。大型パネルや模型、3Dスコープ等により地震や断層について学習することができます。動いた方の地盤である山側は背後の地形が見えるようガラス張りになっており、断層とともに背後の大地がすべて動いたことが実感できます。



野島断層保存館

(2) メモリアルハウス

野島断層保存館の延長上に位置する、断層のすぐそばにありながら壊れなかった民家です。ハウスは地盤と一緒に全体が持ち上がったため少し傾き、中を歩くと床の傾きが実感できます。台所では地震当時の状況を再現しています。邸内には断層の段差や花壇のずれが残されていて、ハウスの海側から見ると地震で壊れた塀がずれている様子がよくわかります。



メモリアルハウス

(3) 「震災体験館」

「震災体験館」は平成16年12月にオープンした新しい施設で、阪神・淡路大震災の揺れを体験できる起震装置と野島断層が語りかけるメッセージを映像にしたシアターがメインになっています。そのほかにビデオライブラリー等も設置され、防災教育に役立てていただける体験型施設です。

(4) セミナーハウス

学校団体等のビデオ学習や語りによる震災の学習、断層や地震の学習を行うセミナールームと、地震や断層等の資料閲覧室があります。毎年1月には活断層シンポジウムを開催しています。



セミナーハウス

(5) その他

自然の恵みを受ける風力発電装置があります。風力で発電している様子をセミナーハウスのモニターでご覧いただくことができます。大きな風車はこの公園のランドマークにもなっています。ほかに「べっちゃんいロック」、物産館、レストラン、芝生広場、屋外庭園などがあります。校外学習等で昼食場所としてご利用いただけます。

3 北淡震災記念公園での学習プログラム

(1) 見学

野島断層を保存している野島断層保存館で、断層



震災記念公園

のいろいろな形を見学していただき、さらに断層のそばにありながら倒壊を免れたメモリアルハウスを見学いただけます。ポイントごとに係員が説明をしています。パネル・動く模型・地震直後の台所などの展示物とあわせてご見学いただくと活断層の動きや地震の恐ろしさがよくわかるようになっていきます。見学時間は30分～1時間です。小規模の団体の場合、係員がご案内し説明をすることもできます(要予約)。

(2) ご見学と地震体験

野島断層保存館・メモリアルハウスを見学していただいた後、震災体験館で地震体験とシアター映像をご覧ください。起震装置に乗って阪神・淡路大震災の揺れを体験することができます。体験は一度に8人程度、時間は40秒です。学校団体等でご利用いただく場合には時間待ちが生じますが、その間映像シアターやビデオライブラリーなどを利用してお待ちいただくことになります。このコースでは2～3時間必要です。被害の状況や断層をご覧になった後、実体験をすることで、防災教育に役立てていただけます。

(3) セミナールームを使っでの学習

見学や体験とは別にセミナーハウスを使用して学習ができます。これは今までにも多くの学校団体等に利用いただいています。

セミナーハウス使用の場合、「震災の語り部」体験談・ビデオ学習・断層や地震についての学習ができます。セミナールームは最大280人収容で、会議室は最大70名収容できます。この施設利用・プログラム利用については事前予約が必要ですので、予約時に相談いただきますと、希望にあわせたプログラムをご紹介します。見学の前にご利用いただく学校団体が多く、ご好評をいただいています。

活断層は野島断層以来身近にはなりませんが、まだまだむずかしい言葉です。野島断層保存館内でも

説明や案内は随所に配置してはいますが、それだけでは十分に理解していただけないこともあります。特に小学生にとっては、教科書にも載っていない言葉であり、見るだけでは理解できないこともあります。「語り部」が野島断層や地震、そして自分の震災体験を自分の言葉で語ることによって、来館者は「語り部」の体験を共有し、改めて保存されている野島断層を見つめなおすことができます。「語り」を聞くことと野島断層を実際に見学することが補完しあって、地震や断層についての理解がより深まると考えています。

(4) 震災の語り部活動

平成11年4月より震災の語り部が活動しています。地元の方々対象の講座修了生の中から「学んだことを多くの方々に伝えたい」という声が上がリ、「語り部」がスタートしました。毎週火曜日の午前10～12時・午後2時～4時にメモリアルハウスでそれぞれのスタイルでの「語り」を行っていますので、入館時にあわせてお聞きください。セミナー室を利用した「語り」も好評を得ています。

(5) その他

セミナーハウスには資料閲覧室を設置しています。地震や断層、地質、自然災害の文献を多数そろえていますので、夏休みの宿題等で利用されるお子さんも多いです。野島断層保存館では防災グッズの展示とともに、地震計を設置し、ナマズの観察も行っています。

見学前の事前学習に活用いただくビデオを用意し、学校への貸し出しも行っています。また、断層や地震についてのご質問にもお答えし、資料をお送りするなど、様々な要望にお応えしています。

4 最後に

現在、年間約40万人の入館者の内、約20%が学校団体です。今後は公園の中の展示ゾーンの整理を行い、よりいっそうわかりやすい学習施設にするため、現在検討を進めています。あの大震災を忘れないために、そして将来の災害に備えるために今後も学習プログラムを含めた展示のあり方に工夫を重ねていきます。

実践事例15

語り部による体験談に学ぶ

北淡町立仁井小学校

1 概要とねらい

震源地の町とはいえ、幸いにも校区には人的被害を受けた人は少なく、今まで体験談としては被災した教師による話や資料を中心に指導してきた。

子どもの中には身近に被災者がいなくて、実際の悲惨な体験を聞く機会のない児童もいる。震災の教訓の風化を防ぎ、震災の町に住む者として、児童にも後世への伝道者としての育成を願う中で、外部から語り部さんを招くことを計画した。

震災記念館に申し込んで、登録されている山根恵美子さん(神戸市在住の主婦の方)を紹介していただき体験談に学ぶ機会を得、次のねらいをもって取り組んだ。

- ・語り部さんの話を聞くことで、資料では得にくい臨場感を肌で感じ、震災当時の状況や心情を知る。
- ・震災の教訓を生かし、正しい判断と思いやりの心をもって行動できる児童を育てる。

2 展開

震災当日の様子を写真を使いながらお話していただく。



3 成果と課題

『地震の話からえたもの』

今日、山根さんの話を聞きました。阪神・淡路大震災の話でした。ぼくたちが2、3才のころにおきた。ぼくは少ししか覚えていない。その時ハッキリと覚えていたら、地震はすごく怖いものだと思っていたと思う。

五才の少女が、こわれた家の下じきになっているお母さんを助けようとする話で、お母さんが出られなくて「早くにげ。ありがとう」と言ったと聞いて、心にバキユンときました。少女は本当に必死で助けようとしてい

たけど助けられなかった時は、すごく心が痛んだだろうと思いました。

それと、犬を子供のように大切にしていた人が、地震で火がまわって、助けられず、今でも犬を見ると涙が出てくるという話も聞きました。みんな一人一人助けようとしていたのに感動しました。

地震には前もって準備をしとかなないとダメということもよく分かりました。ぼくは、もし、こんなことが起こったら、すぐに何をしたらいいか考えて、行動できるような人になれるように努力したいです。 【6年男子】

『永遠の命』

一番心に残ったのは、五才の少女がお母さんを助けようとしたけれど助けられなかった話です。その少女は身がさかれる思いだったと思います。もし、わたしがそういう立場だったら、悲しみにたえられないし、むちゃくちゃになると思う。でもその少女は涙一つ流さなかった。わたしはその少女のことを尊敬した。でも後で考えてみると、涙が出ないほど悲しかったのかもしれないと思った。心では泣いているけれど、表情には出せないほど悲しいことなんて、わたしは体験したことがない。人に永遠の命があったらいいのに。火がせまって来るというきょうふの中でお母さんは、「にげい。早くにげい」と言ったそうだが、わたしだったらはなれられない。死ぬ時もやっぱり一緒がいいから。その少女は多分はなれなくなかったけれど、他の人に連れて行かれたんだと思います。お母さんは、「ありがとう」と、最後に言って火につつまれたんだと思います。その「ありがとう」は、お母さんを必死に助けようとした少女に向けられたんだと思いました。そんな少女とお母さんの心に、わたしは心が動かされました。

【6年女子】

震災の記憶のない児童や震災後に誕生した児童へと学校現場も変わってきている。語り部の方の生の体験談を聞くことの重要性を再認識できた。来年度は今一度原点に戻り震災記念館を見学し、この語り部による体験談の取り組みも重ねて続けていきたい。

特色学科

県立舞子高等学校環境防災科

はじめに

本校は、神戸市西部の丘陵地に位置しており、周辺にはのどかな住宅街が広がっている。

昭和49年4月に開校し、昨年度に創立30周年を迎えた学校である。当初は全日制普通科の高等学校として出発したが、平成7年の阪神・淡路大震災以降、県教育委員会を中心に学校における防災体制・防災教育の推進が図られる中で、震災の教訓をつなぐ場の創設が本県高校教育改革の基本構想でも謳われ、それを受けて平成14年4月、全国で初めて「防災」を一つの切り口とした専門学科の設置に至った。

様々な環境問題とともに、地震や火災・風水害などの防災に関する科学的知識や技能等を座学と実践を織り交ぜながら、総合的・学際的に学ぶことを通して、21世紀の社会づくりに貢献できる人材の育成に取り組んでいる。

1 三つの教育理念

- 阪神・淡路大震災の教訓を生かし、自然環境や社会環境との関わりを視点に据えた防災教育を推進することによって、共生社会における人間としての在り方・生き方を考えさせる。
- 大学やその他の研究機関、関係機関等との連携を密にし、実践的・体験的な学習を通して理解を深めるとともに、「環境」「防災」に関わる様々な課題の解消に向けて、主体的・自発的に考え、行動できる力の育成に努める。
- 自然現象のメカニズムや災害と人間社会の関わり方の学習などを通して、自己を取り巻く様々な環境に対する理解を深めたり、災害に対応する力を身につけるなど、「Think Globally, Act Locally(地球規模で考え、地域で活動する)」人間の育成に努める。

2 カリキュラム編成の視点

カリキュラム作成にあたっては、まず防災の本質を考えた。太平洋のど真ん中の台風は災害とはならない。その台風が日本に上陸し社会に被害をもたらしたとき、災害となる。災害はこのように自然環境(台

風)と社会環境(社会)が重なり合っているところで発生する。その災害の大きさは、自然環境側の要因、つまり台風や地震などの自然現象の大きさと、社会環境側の要因、つまり社会の脆弱さ、あるいは防災力との比較関係で決まる。自然現象が大きくても、社会の防災力がそれを超えていれば災害とならないか、災害となっても軽微な被害ですむ。一方、自然現象が小さくても、社会の防災力がそれに耐えられなければ災害が発生する。このような考えから、カリキュラム編成の基本に、社会環境と自然環境という二つの視点を設定した。

3 教科の概要

自然環境では、1年生の基礎科目として地学をもとに「環境と科学」という科目を作った。地震のメカニズムや地球の内部のつくり、地形など、地震防災や水防に必要な知識を習得し、「地学好き」「地理好き」を育成するのが目的である。「自然環境と防災」では地球的視野を持たせようと、環境保全と災害の関係を明らかにし、環境との付き合い方を実験・実習を多用しながら科学的に教えている。2年・3年と連続で履修する。

社会環境では「災害と人間」を核に据え、1年生で取り組む。阪神・淡路大震災の語り継ぎ、教訓からの学びを学習の中心とし、震災を体験し、応急対応、復旧・復興に携わってきた多様な外部講師による授業、校外学習など、体験的な学習を通して教育目標である「命の大切さ」「助け合いのすばらしさ」を学んでいる。「社会環境と防災」は防災の理論面を受け持ち、時には新聞記事や学術論文を読んで知識を深めている。また、後述するような実践的な教育活動を展開している。2年・3年の連続履修である。

「人と社会」はボランティア・福祉・心の健康を3本柱にしている。あえて「心のケア」と言わず「心の健康」としたのは、思春期、青年期の健康な心のあり方も考えて欲しいという願いからである。

「アクティブ防災」は活動面を受け持つ。長田の歴史と震災被害を調べ、まち歩きを通して復興を考える授業、ネパールとの国際交流を通して途上国での防災体制づくりと途上国支援を考える取り組み、国

連やアジア防災センターの英文論文を読む授業などがある。2年、3年で連続履修する。

「卒業研究」は、前半で小学校2年生のときに体験した阪神・淡路大震災を記録する冊子「語り継ぐ」を作成した。後半は自分の興味ある分野の研究を深め、論文、ビデオ、絵本、模型、ゲーム、ゲームソフトなどにまとめた。

IT教育にも力を入れ、1年生で「防災情報」を学び、3年生では選択科目で防災情報の学習を深める。

4 モチベーションを高める

自然環境の学習は地学など既存の科目でかなりカバーできる。実際、全国で行われている防災学習の実践の中には、火山や地震を地学的なアプローチで学ぶものが多くある。ところが、社会環境と関連した防災学習はまだ始まったばかりである。これまで、兵庫県では、従来の安全教育に加えて、ボランティア精神の尊さや助け合いの心など、震災から学んだ多くの教訓を踏まえながら人間としての在り方生き方を考える「新たな防災教育」を進めてきたが、その広がり高校においてはまだ十分とはいえない状況にある。

そこで、本校においても、生徒の防災学習に対するモチベーションを高める工夫を重ねているが、以下にあげる実践事例は、そうした取り組みの一部である。環境防災科の理念を達成するために社会環境の視点から考えた学習活動であるが、同時に、多くの高校がこうした実践をたたき台として、地域の特色を加味した様々な形の防災教育に取り組んでいただけたらと思う。

5 防災コンセプトマップ

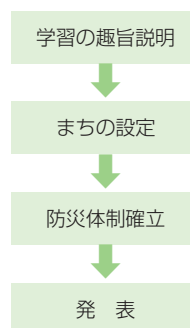
◇ねらい

- ・一連の防災学習の冒頭に行なうことで、防災に関する知識の不足に気づかせ、学習の意欲を喚起する。また、社会環境の複雑さ、自然環境とのかわりについても気づかせる。
- ・学習の最後に再度行なうことによって、一連の学習を通して身につけた知識量をはかることができる。また、学習内容の定着につながる。

◇単元の構造と学習の展開

- ・B4程度の紙の中央に「阪神・淡路大震災」と書く。

- ・その周辺にそれに関わるすべてのこと、たとえば、ライフライン、ボランティア、火災、心のケア、家屋倒壊、耐震などを書き、関連する項目を線でつなぐ。
- ・つないだ線の周辺部分にその課題、問題点、解決方法など、気づいたことを書き込む。
- ・以上の内容を約1時間で完成させる。
- ・完成したコンセプトマップをパワーポイントやOHP、教材提示装置などを使って全員に提示し、説明する。



◇成果と課題

- ・学習内容の点検、定着に成果がある。
- ・社会環境の複雑さ、防災が様々な分野に関わるものであることを認識し、学習のモチベーションが一層高まる。

6 架空のまちの防災体制

◇ねらい

- ・架空のまちを設定するために、地形、産業、人口、文化、自然環境など、さまざまな要因を考える。地学や地理だけではなく、さまざまな教科・科目で学習したあらゆる知識を活用して考える。
- ・自分が設定したまちには愛着がある。好きなまちを守ろうとすることで防災へのモチベーションを高める。
- ・過去に学習した防災の知識の総まとめ、新たな課題の発見と課題解決学習の道筋を提示する。

◇単元の構造と学習の展開

学習自体は極めてシンプルである。与えられる課題は、「自分でまちを設定すること」「その防災体制を考えること」だけである。ただ、そのシンプルさにこの学習の深さがある。まちの設定では、自然環境と社会環境の両方を考慮しなければならない。山間部か海岸部か、あるいは平野部か。川は流れているのか、地すべり地形はあるのか、断層は走っているのか。このような「環境と科学」で学んだ要素をふんだんに取り入れ、さらにさまざまな社会環境にも目を向ける。産業は何か、人口はどれくらいか、インフラはどうか、公共交通機関はどうか、消防や自衛隊の組織はまち

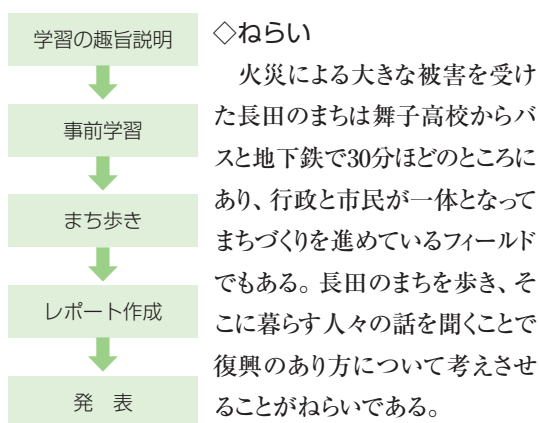
にあるのか、隣接しているのか、遠距離にあるのか。行政とNGO・NPOの関係はどうか。避難所となる学校はいくつあるのか。このような社会に関わるすべてのことをまちに取り込んでいく。

防災体制を作る時は、発生しうる災害を想定し、既存の市町村のマニュアルを参考にする。自分の阪神・淡路大震災の体験とこれまでの学習で学んだことから、不足することを見出し、そこに新たなアイデアなどを盛り込んでいく。期待する成果物の量・質を考え、生徒の進捗を見ながら、5時間、あるいは10時間といった時間を与える。

◇成果と課題

- ・学習の定着、課題の発見と解決、防災への意識付けに高い成果がある。
- ・学習段階に応じて、設定するまちの質をえることで、小学生から大学生まで、さまざまな発達段階で取り組むことができる。

8 長田のまち歩き



◇単元の構造と学習の展開

事前学習では長田の被害状況を、インターネットを使って調べ、レポートにまとめる。その後、4～5人程度の班を作り、長田のどの地区を訪れたいかを話し合う。事前にいくつかのまちづくりの実例を示しているが、それにこだわる必要はない。話し合っ決めた訪問先で何を聞くかも事前に相談しておく。まち歩き当日は3時間程度をかけて、インタビューをしていく。商店街、学校、消防署など、様々な場所で長田に暮らす人々の話を拾っていく。聞いた話を持ち寄ってレポートにまとめていく。レポートには復興への提言や感想も書き込ませる。

◇成果と課題

- 事前学習をすることによって、インタビューの質が向上し、地域住民とより深い話し合いができる。
- ・復興のあり方を市民の視点で考えることができる。
- ・防災という課題にフィールドワークが不可欠であることを実感する。
- ・環境防災科の教育目標である「命の大切さ」や「助け合いのすばらしさ」を地域住民の体験から学ぶことができる。

8 小学生との合同防災学習

地域にある多聞東小学校と合同で防災教育を進めている。総合的な学習の時間で防災教育を取り上げた多聞東小学校から協力依頼があり、環境防災科の生徒にとっても極めて意義深い学習ができると判断して合同で進めてきた実践である。多聞東小学校は年間の防災学習の中の一こまに位置づけており、本校においても同様に、年間の学習の一環と位置付けて取り組んでいる。以下、環境防災科発足1年目、2年目の取り組みを示す。

◇ねらい

- ・環境防災科で学んだことをわかりやすく小学生に伝えることで、高校生の学習の定着を目指す。
- ・防災に興味を持つ子どもを育成するきっかけとする。
- ・子どもをターゲットにした防災教育は、子どもから家庭へ、家庭から地域へと広がっていく。単に小学校にとどまらず地域への貢献として位置づける。
- ・震災体験の継承・発信に取り組む。

◇単元の構造と学習の展開

授業の内容

年	1年目	2年目
3	安全マップづくり	安全マップづくり
4	震災体験・地震防災	震災体験・地震防災
5	阪神大水害 土石流実験	
6	震災体験・地震防災	地震と火山

マップづくりは午前中3時間をかけ、小学生と高校生が班を作って地域を回り、小河川、危険な箇所、防災の倉庫などを見て回り、それらを写真に撮って地図に貼り、意見や感想も地図に書き込んでマップを作った。他の授業はそれぞれ2時間をかけ、震災体験

をパワーポイントや壁新聞を使って発表したり、阪神大水害の新聞を作って説明したりした。ペットボトルや砂を使った簡単な土石流や液状化の実験も行った。

成果と課題

- ・子どもたちにとって、高校生に教えてもらおうということが新鮮で学習意欲の喚起につながっている。
- ・小学生に噛み砕いて教えるためには高校生が十分に理解しておく必要がある。準備を通して自主的に学習するきっかけとなる。
- ・子どもたちに防災を強く意識させるきっかけとなる。
- ・子どもたちに防災の必要性を説いた高校生もその意識を持ち続けようという姿勢になる。

9 震災メモリアル行事

「阪神・淡路大震災を忘れない

～21世紀を担う私たちの使命～」

被災地では、阪神・淡路大震災の教訓を語り継ぐ必要性が強く指摘されてきた。未曾有の経験と命の大切さ、助け合いのすばらしさ、そしてあの極限状態で発揮された人間の知恵を後世に、日本中に、世界に語り継ぐことが、新たな災害への備えを進めることにつながっていく。舞子高校は、環境防災科の設置に向けた研究が始まった年度の1月(2001年1月)に、第1回目のメモリアル行事を開催した。以来、毎年1月17日前後に行事を開催し、本校生、職員、保護者、多聞東中学校1年生、多聞東小学校6年生、地域住民、教育関係者など1,300人規模で震災について考えてきた。はじめの2年間は記念講演と分科会、炊き出しを実施して震災の継承と学習に力点を置いた。3回目、4回目は防災学習に取り組む中学生の発表、生徒と地域代表、研究者によるパネルディスカッション、小学生を対象とした展示とクイズラリーなど、児童生徒の活躍にスポットを当てた。

最初の2回は生徒会が中心となって希望者を募って実行委員会を組織し、運営、記録などの仕事を生徒が担ってきた。環境防災科がスタートしてからは、授業の一環として本校の生徒が企画、運営、記録にあたってきた。

行事の内容は、震災を広く発信し、防災教育の教材としても利用できるように小冊子にまとめ、HPに掲載している。



小学生との合同防災学習

◇成果と課題

- ・防災教育に力を入れる本校の中心行事として定着してきており、生徒の心の中に防災の必要性を喚起する大きな役割を果たしてきた。
- ・さまざまな分野の方々を招くことで、舞子高校を核とした防災のネットワークができた。このネットワークと環境防災科の専門授業でのネットワークが相互補完的に機能し、より強固なネットワークとなっている。
- ・環境防災科の生徒、生徒会役員にとっては、行事の企画、運営にかかわることで、学校への帰属意識が高まり、達成感を得ることができた。
- ・行事の運営経験は、将来的には何らかの形で災害時のボランティアコーディネートなどの力を育むことにつながっている。

10 おわりに

試行錯誤の中で本科創立から3年が経ち、平成17年3月に第1期生が卒業を迎えた。震災から学んだ多くの教訓を次代につなぎ、記憶を風化させないこと、その語り部としての役割を担うこと。原点は平成7年1月17日。本科で学んだ生徒たちは一味違うな、そんな学校づくりに向けて、今後とも教育内容の一層の充実に努めたい。

実践事例16

震災学習会〈命の学習〉

県立高等養護学校

1 行事概要とねらい

【行事実施計画の趣旨】

多くの人の命を奪った阪神・淡路大震災を契機に、「新たな防災教育」の一環として、本校では命の大切さ・命の尊さを考える「命の学習会」を持つようにしている。昨今、テレビや新聞には毎日のように殺人事件や自殺が報道され、人の命や自分の命を軽視したり、大切にしない行動が目につく。生徒たちに「人はなぜ生きるのか」について一緒に考えさせ、命の大切さを自覚させたい。

【行事の目的】

- ①殺人事件や自殺のニュースについて考え、自他の命の大切さを自覚させる。
- ②人はなぜ生きるのか、人生の目的について話し合い、自らの生き方について考えさせる。
- ③命の学習をとおして、自他を大切にすることを育てる。

2 行事の展開

- 1 実施日時 平成16年1月16日（金）
- 2 内 容

1校時 体育館での全体学習

- ①震災で尊い命を落とした方のために1分間の黙祷
- ②導入 「命の学習」の趣旨説明（上記趣旨参照）
- ③展開
 - ア 新聞記事 宇梶剛士さんの「自律してこそ大人」（神戸新聞平成16年1月12日）の朗読（全校生対象に教師による朗読）
 - イ 内容についての理解
大人に不信感を持っていた彼が、自分の経験や意志から「価値あること」をきちんと認識してこそ真の大人であり、自立であると分かっていく経験を読み取る。
 - ウ 挫折を繰り返しながらも夢を追い続ける宇梶さんの生き方について、意見を出し合う。

2校時 HR教室での討議 テーマ「人はなぜ生きる」

- ①導入 生徒への質問
 - ア あなたは死にたいと思ったことはありますか。
 - イ 「はい」と答えた生徒に聞きます。それはどんなときですか。
 - ウ あなたはなぜ生きるのですか。
 - エ あなたが幸せに感じるときはどんなときですか。

②展開

- ア 「なぜ生きるか」について考え、生きる喜びについて話し合う。

【期待される意見の展開】

ささやかなことでも幸せを感じられること（人から喜ばれる・感謝される行動等）。人から「ありがとう」と言われると、その一言で喜びを感じる。

逆に、喜びや幸せを見つけようともせず、後ろ向きな行動が目立つと他人は離れていく。



他人も自分も好きになれず、自他を傷つけることになる。

自分のことが好きになり、自分を大切にできてこそ本当の意味で他人を思いやることができ、大切にできる。

- イ 強く生きようとするエネルギーについて話し合う。

【期待される意見の展開】

人間は目的（目標）を持つと目的達成のために苦しいことも耐えられる。



力強く生きようとする自分が現れてくる。

目的意識がはっきりしたとき、力強く生きようとするエネルギーが生まれる。

③本時のまとめ

「あなたたちは人生の中で一番多感な時期を生きています。いろんなことを考えると思いますが、生まれてきた命を大切にしてお過ごし、充実した人生を歩んでほしいと願います。時間ほど我々に公平に与えられているものはありません。限られた命、生きている間は精一杯生きよう。」

3 成果と課題

本校生徒は自らの「いじめられた経験」等を土台に、自他の存在を大切にすることについては非常に真摯に考える。今回の「自立してこそ大人」を読んで、挫折を繰り返しながらも自らの人生を真剣に生きることについて、個々の生徒の言葉で素直に語り合い、生きることの大切さを自分なりに考えることができたと思う。「命の大切さ」を思う態度を日々の生活の中でさらに定着させ、いじめや暴力・暴言、他者に対する中傷・誹謗を許さない集団づくりを進め、生きる力を体得させたい。

実践事例17

震災の教訓を生かした防災教育

県立神戸養護学校

はじめに

本校の校区には、阪神・淡路大震災の被災が最も大きかった長田区及び兵庫区があり、当時中学部1年生の生徒1名が亡くなった。校舎は岩盤の上に建っているため、被害は比較的少なく、障害児のいる家族の避難場所として開放し、教職員の懸命の努力と保護者や地域の協力により、震災後わずか2週間で学校再開を果たした。

震災のつらい体験を貴重な教訓とし、知的障害児童生徒への地震の影響や心のケアのあり方について研修を重ねるとともに、災害時に柔軟に応用できる「防災マニュアル」の作成等に精力的に取り組んだ。その成果は、平成8年3月に「知的障害児に対する防災教育の課題」(平成7年度教育研究グループ奨励事業)としてまとめた。その中で、「命の大切さと他人を思いやる心を育てる教育」「危機意識の日常化」「あらゆる場面を想定したシミュレーションの反復」等について述べており、本校ではそれを指針として防災教育を推進してきた。

1 防災教育のねらい

- (1) 震災の教訓を生かし、防災教育の日常化を進める。
- (2) 自らの命を大切にするとともに他者を思いやる心や態度を身につける。

2 防災・救急体制の整備と充実

- (1) 学期に一度の「防災管理委員会」の開催。
- (2) 毎月の施設・設備の安全点検とそれに基づく改善・整備の徹底。
- (3) 学校行事等における「救急体制マニュアル」等の整備及び防災意識の日常化の徹底。

3 防災教育の充実

- (1) 火災避難学習(6月)、予告無しの火災避難学習、地震避難学習(1月17日前後)の実施。
- (2) 宿泊学習等の学校行事の事前学習における防

災意識の高揚。

- (3) 児童生徒の実態に応じた副読本の編成。

4 職員の指導力向上、保護者との連携

- (1) 職員や保護者を対象とした救命救急講習の実施。
- (2) 職員と保護者による初期消火訓練等の実施。
- (3) 職員を対象とした防犯訓練の実施。

5 今後の避難学習における課題

- (1) 学校において、医療的ケアを受けている児童がいるが、医療的ケアの最中に火災、地震等が発生した場合の避難について、マニュアルを作りシミュレーションをする必要がある。
- (2) 敷地内が建物及びスクールバスの駐車等で過密状態にあり、避難場所の設定が難しい。近隣の学校、施設等と連携を図り、安全な避難場所を確保する必要がある。

障害児に対する防災教育の観点から本校が果たすべき「地域のセンター的役割」は、震災の経験を教訓とした、知的障害児への地震の影響に関する理解や心のケアのあり方等についての情報提供等を含め、校区の障害児者の家族に安心と安全の場を提供することにあると捉えている。このことを念頭に置き、日々の保護者の願いに誠意を持って応え、地域の信頼を一層深めていく学校づくりを目指したい。



火災避難学習で消防自動車に乗り込む生徒

1 防災訓練の充実

阪神・淡路大震災が起こる前は、防災計画の中に地震の項目は設けておらず、地震を想定した避難訓練も実施していなかった。震災後、対応等を検討して防災計画に入れ、震災避難訓練も年に1回は必ず実施するようになった。

本校は知的障害養護学校であり、重度重複や障害の多様化もあるうえに、小・中・高と年齢差もあり、災害に対する認識は個々に大きな差があり、全体的に災害に対する認識や対応はむずかしい現状である。

児童・生徒が常に災害に対する意識を持ち、適切に対応できるようにするためには、避難訓練を重ねることと、日常生活のなかで繰り返し指導していく必要がある。特に養護学校では、実際に災害が起こった時には、周りにいる大人の落ち着いた対応が不可欠である。児童生徒の避難訓練としてのみではなく、児童生徒と教職員とが一体になった真剣な訓練が求められる。

2 訓練のねらい

- (1) 状況に応じて臨機応変に行動できるようにする。
- (2) 指示に従って的確に行動できるようにする。
- (3) 震災についての理解を深める。

3 訓練の展開

〔実施日 平成16年2月25日〕

①地震発生

- ・非常ベル(事務)→校内放送(事務)

②避難行動

- ・机の下にもぐる等、身の安全を確保する。
- ・脱出口を確保する。
- ・指示に従って中庭に避難する(雨天時は体育館に避難する)。

③点呼確認

- ・各学部ごとに整列し、点呼(児童生徒、職員)をとり、人数を報告する。(学部長→教頭→校長)
- ・点呼確認後、自立活動室へ移動する。

④避難指導

- ・地震が起こった時の行動について
- ・地震がおさまった時の行動について
- ・避難する時の約束事について
お(おさない)・は(はしらない)
し(しゃべらない)・も(もどらない)

⑤ビデオ鑑賞

「タイムスリップ1923 守のミラクル地震体験」

⑥講評(校長)

4 成果と課題

(1) 児童生徒の変容と課題

- ①日常の訓練を重ねることで基本的な行動を理解させ、また体験型の訓練を実施することにより、地震というものが身近に起こりうることを感じさせたり、理解させやすくなった。鳥取県西部地震の際には、日頃の訓練の成果が感じられた。
- ②スクールバスからの避難訓練、シューターを使っての脱出訓練、起震車体験、消火訓練、放水訓練等も取り入れ、様々な災害を想定した訓練を行い、児童生徒にも災害に対する認識が育ちつつある。
- ③訓練だけでなく、各地で起こった災害等について、全校集会、学部集会、各クラスにおいて、児童生徒の実態に合わせて話をし、災害の怖さ、迅速で安全な避難の大切さを指導してきた。
- ④震災以後、各教室にヘルメットを配布し、日常からヘルメットを被り慣れるように指導したが、頭に被り物をするのを拒否する児童生徒が何人かいて、転倒等の危険性の高い児童生徒の安全確保に課題が残る。

(2) 学校の防災体制と安全管理の充実

- ①ロッカー、棚等、転倒の危険のあるものは固定し、安全性の確保に努めている。
- ②近年、新校舎建設、運動場の縮小、学校前の公園の整備等で環境が変わっており、避難経路及び場所の再点検を実施した。